



1号住居跡



2号住居跡



1号住居跡南東隅



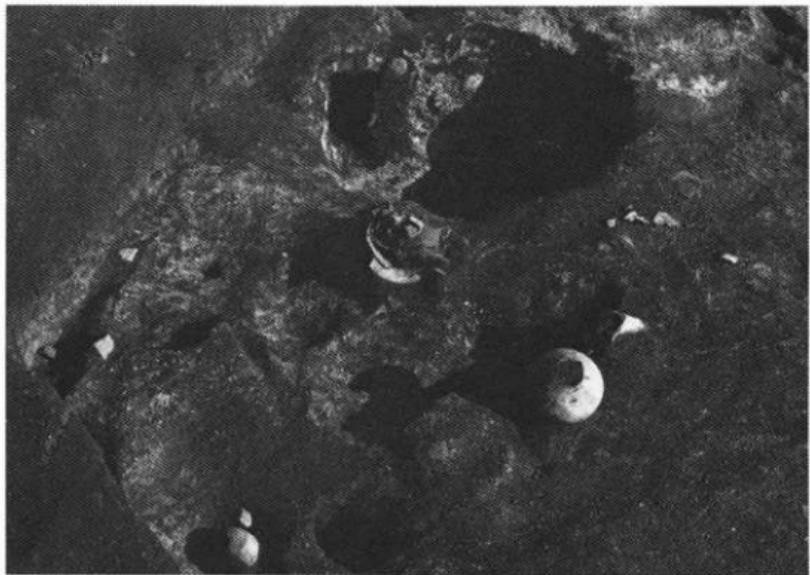
1号住居跡



2号住居跡



2号住居跡南西隅



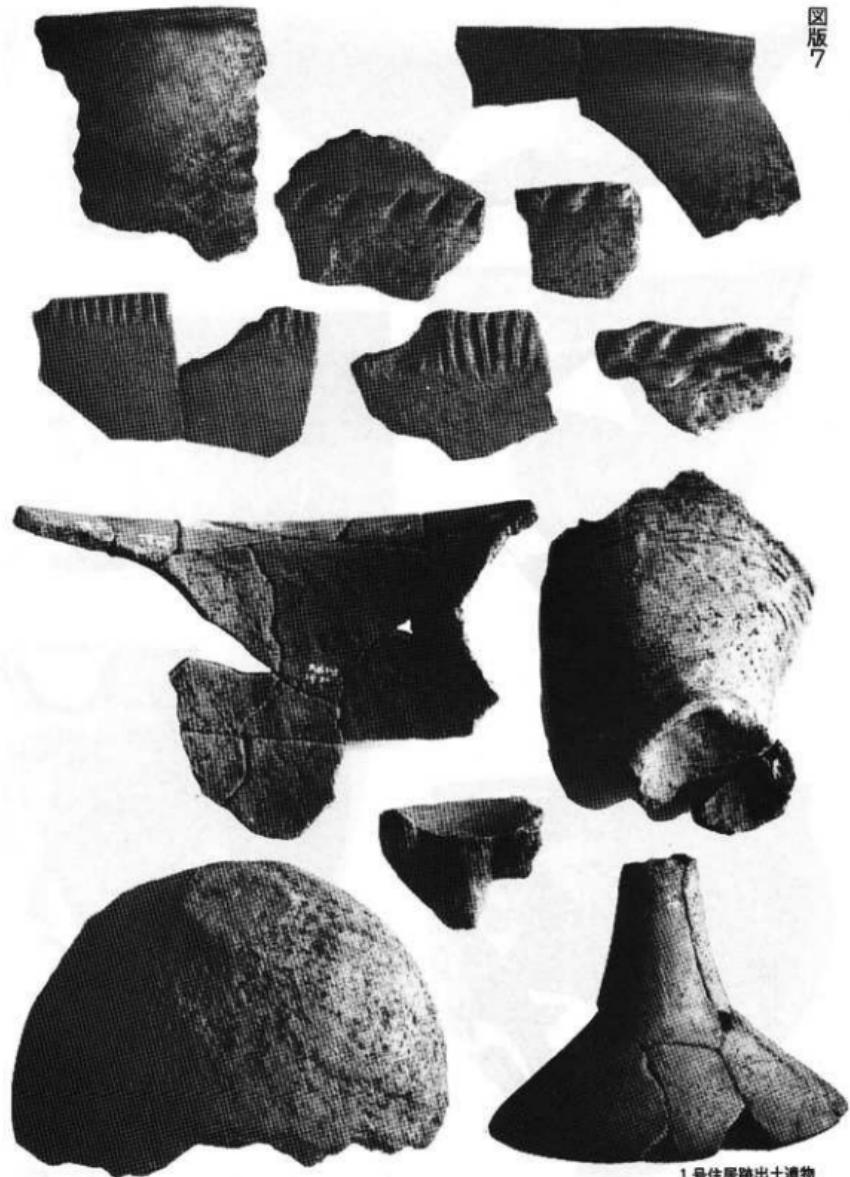
2号住居跡北東隅



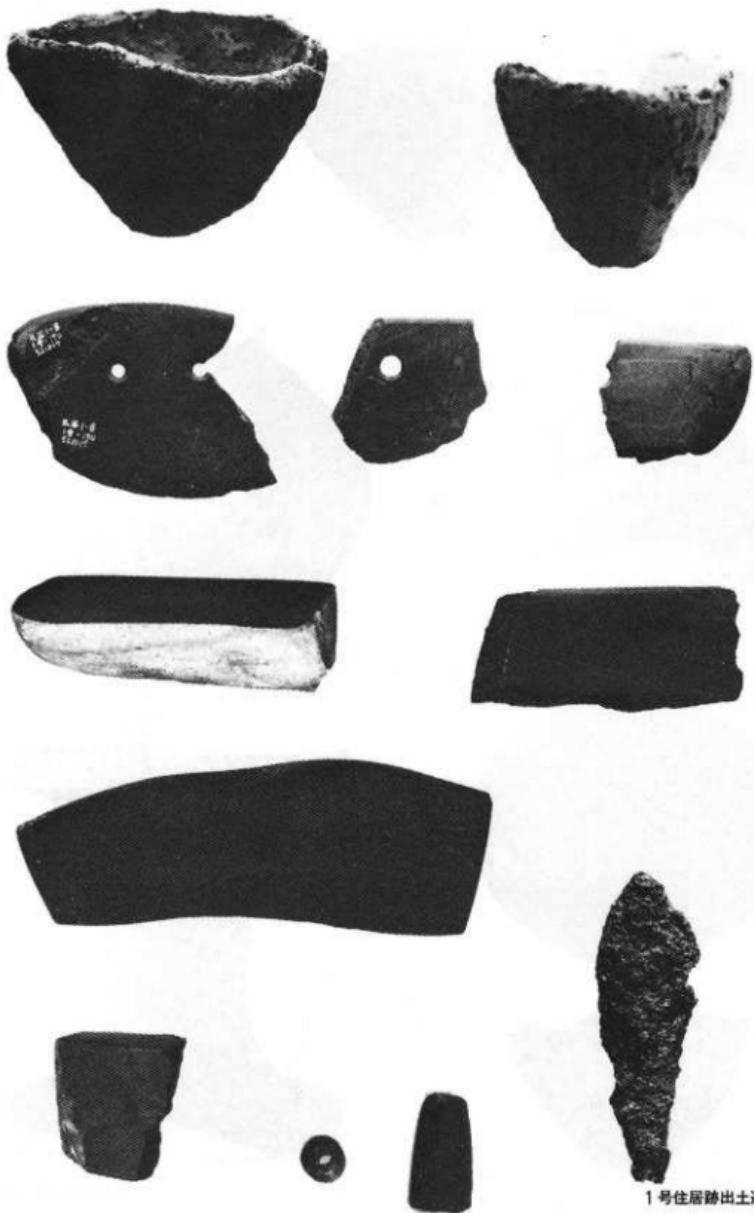
2号住居跡南西隅



1号住居跡出土遺物



1号住居跡出土遺物



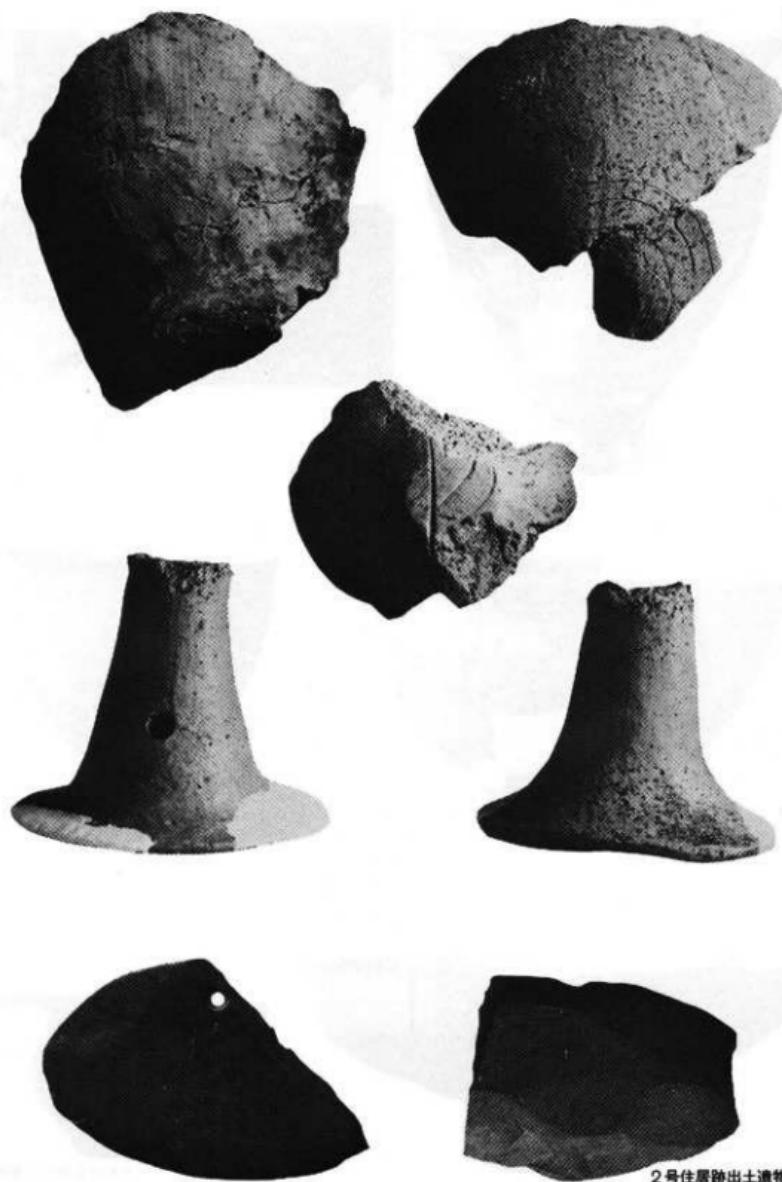
1号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物

V. 田野町の歴史的概観

宮崎郡田野町は同郡清武町の西に接し、西は北諸県郡山之口町に境している。町の南に鰐塚山(1,119m)があり、この鰐塚山脈より片井野川、清武川が発して、町を西から南に流れている。古代には日向国府（西都市）から宮崎を経て、この流域を遡って島津駅に至る駅路のあった所で「平家物語」の俊寛島流しの條に「角て日数も積り行けば、日向國アヤヘ（赤江）の瀬和歌の津にこそ着にけれ（中略）それより室野船引岳を越し、西方島津の庄に着給ふ。」とあるのが、これである。従ってこの町には遺跡が多く、昭和37年に同町の青木遺跡を調査した鈴木重治氏（当時宮崎県立博物館学芸員）は「発掘調査短報2」に次のように書いている。

「ここ数年来田野町内では多くの先史時代関係の遺跡が発見確認されている。縄文時代以前のおもなものだけに限ってみても、鹿村野ズクノ山、同上ノ段、同牧、前平山ろく、芳ヶ迫、同町、黒草、片井野、仏堂園、青木、それに宮大演習林登り口がある。この内最も古いものは日本考古学協会委員芹沢長介氏によって、無土器時代（先土器時代）のナイフと断定された小型石器を出土する演習林登り口であり、南九州最古の遺跡の一つである。縄文時代の遺跡ではズクノ山遺跡から粗い押型文土器が出土しており早期末に編年されている。芳ヶ迫遺跡からは前期の前平式土器が採集され、具穀文系の代表的な資料を見る事ができる。中期の資料はほとんどなく、後期の遺跡が多く代表的なものとして青木遺跡を挙げる事ができる。これらの遺跡はすべて河岸段丘上や扇状地上に位置しており、青木遺跡等は大きく見てすくなくとも三回以上流路を変えた井倉川の段丘上に営まれている。この様な遺跡の分布を確める事は、生活の場所の変遷を考えさせると同時に長い期間にわたって地形が徐々に変化していく事を示してくれる。」（1963. 10 宮崎高等学校郷土研究部「郷土研究」創刊号による）

そのほか船ヶ山から縄文土器や鹿村野上ノ原などの遺跡が知られており、箱式石棺の所在地も知られている。中世においては都於郡城主の伊東氏の所領となり、伊東氏が島津氏に敗れてからは島津氏の所領となり、天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州統一後は鉄肥藩伊東氏の領地となった。（石川恒太郎）

黒草遺跡

宮崎郡田野町黒草

目 次

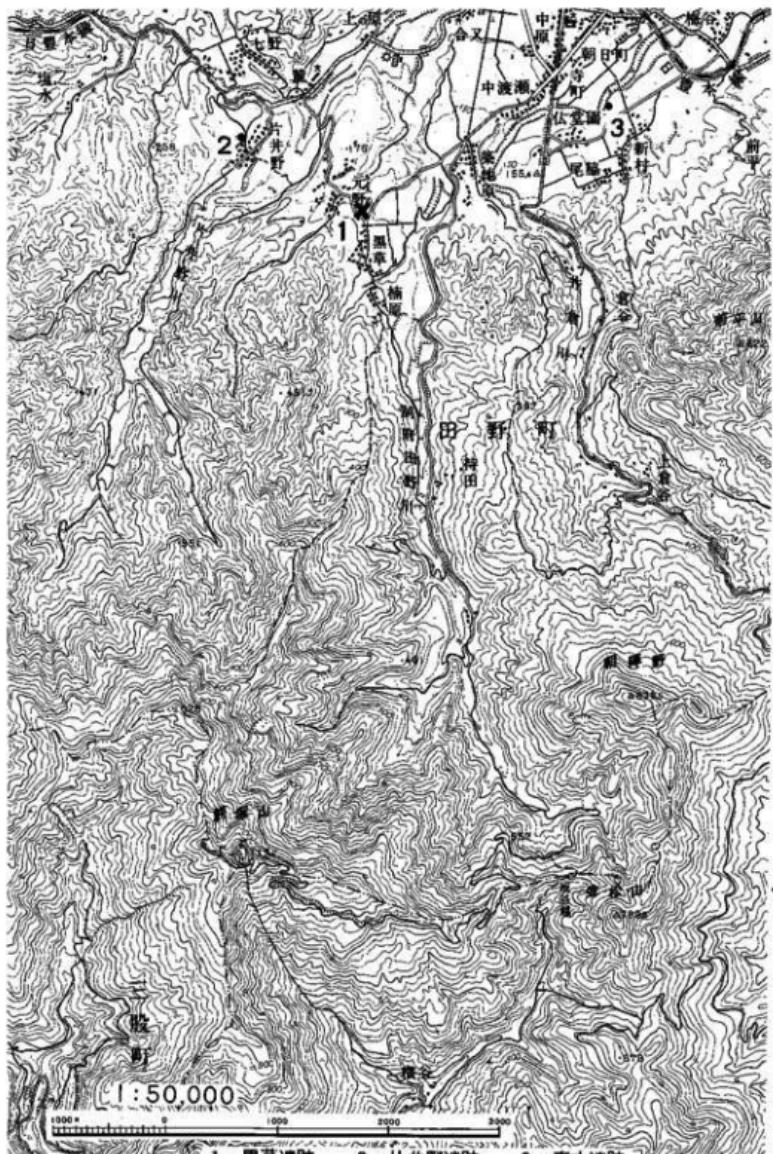
1. 田野町の縄文時代における環境	160
2. 位置と現境	161
3. 調査の経過	161
4. 包含層の状態と各地区の概況	164
5. 遺 物	169
(1) 土 器	169
(2) 石 器	173
6. 結 語	175

插 図 目 次

第1図 遺跡所在地図	159
第2図 周辺地形図及び発掘地区図(1)	162
第3図 タ (2)	163
第4図 タ (3)	163
第5図 I地区土層実測図	165
第6図 III地区晚期土器出土グリッド西壁土層実測図	165
第7図 III地区土層実測図	166
第8図 VI地区土層実測図	167
第9図 VI地区の遺物出土状況	168
第10図 縄文前期土器実測図・拓影	169
第11図 縄文後期土器実測図・拓影	170
第12図 縄文後期土器その他実測図・拓影	171
第13図 縄文磨研土器実測図	171
第14図 縄文晚期深鉢形土器実測図	172
第15図 底部実測図	172
第16図 弥生式土器実測図	172
第17図 石匙・石鎌実測図	174
第18図 黒草遺跡 A地区表採土器実測図	175
第19図 黒草遺跡 A地区表採石器	176

図 版 目 次

図版 1 (1) 調査区遠景	177
図版 1 (2) VI地区近景	177
図版 2 (1) VI地区発掘風景	178
図版 2 (2) VI地区(綾式)土器出土状況	178
図版 3 VI地区土層	179
図版 4 遺物群	180
図版 5 出土土器 (1)	181
図版 6 タ (2)	182
図版 7 石 器	183



第1図 遺跡所在地図

1. 田野町の縄文時代における環境

田野町に所在する遺跡については、縄文時代をはじめとし、未知の部分が多い。片井野・前畠・青木・黒草、これらが現在田野町内において確認されている縄文時代の遺跡あるいは遺物包含（散布）地である。片井野遺跡についてはその詳細は明らかでないが、前畠遺跡については縄文前期土器の出土例が報告されており、注目されるところである。この前畠出土の土器は、いわゆる貝殻条痕土器であり、茂山護氏によれば「貝殻条痕による文様構成や器形から石坂式からの派生とも考えられる」と言い、課題を投げかけている。今回の黒草遺跡の発掘調査においても、縄文前期土器に属するものとして「曾畠式」土器片及び縄文施文土器片を検出しておらず、田野町内における縄文前期の問題は、先の前畠出土の土器も含めておおいに期待されるところである。

一方、黒草・青木両遺跡は、かねてより宮崎県内における縄文後期の土器形式を考える上で注目された遺跡であった。黒草遺跡については、昭和46年に宮崎大学史学研究部考古学班の手による発掘が行なわれており、石錐・石錘・石斧等の石器類の出土とともに「綾A式・B式」「市来式」の土器類の出土が知られている。他方、青木遺跡については、賀川光夫・鈴木重治氏らの調査により、黒草遺跡とほぼ同時期を同じくし、「指宿式」「綾式」から「市来式」「下弓田式」の縄文後期土器の出土が報じられている。さらにあわせて「青木式」なる（「指宿」「綾」式と「市来」「下弓田」式の中間位の型式）新型式の提出がなされている。

県内における縄文後期は、「綾式」「下弓田式」「陣内式」の各型式とその細分化によって基礎付けられる。しかし、県下における縄文後期の調査例が少ないとあいまって、各型式間の継続ないしは転移・展開過程若しくは遺物相互の関係に今一つ不明瞭さを拭い切れないところである。その意味で、「青木式」なる新型式の設定は、意義あることであったが、なんとしてもその実態の不明確なことはいかんともしがたい欠落である。田野町出土土器はその地理的位置からいって、「綾」「下弓田」両型式の考察にとって示唆的なものである。今回の黒草遺跡の発掘調査に際しても、「綾式」及び「下弓田式」の層位的関係の明確化と継続ないしは転移・展開過程若しくは相互関係の把握という作業を日差したのであったが、残念ながら本調査では課題に応えることは出来なかった。

以下、このような田野町内の縄文時代研究の現状と課題に立って、黒草遺跡の発掘調査報告を記すこととした。

注（1）文化庁文化財保護部『全国遺跡地図 宮崎県』（1977年）

（2）茂山 譲『宮崎郡田野町採集の貝殻条痕土器』『宮崎考古』第4号（1978年）

（3）宮崎大学史学研究部考古学班『黒草遺跡』（1971年）

（4）鈴木重治『宮崎県田野町青木遺跡の調査』『日本考古学協会昭和38年度大会研究発表要旨』（1963年）

2. 位置と環境

今回、発掘調査の対象となったのは宮崎郡田野町字元野原・同黒草・同元野河内を含む地域である。宮大史研考古学班による発掘の行なわれた、周知の遺跡としての地点（字元野原甲12817番地・本報告においては便宜上、黒草遺跡A地区と記す）よりほぼ300m程離れた地点から、北東・南西に向かう地域である。当初、黒草遺跡A地区の遺跡としての広がり、あるいは外郭・関連遺跡検出の可能性が考えられた。

本発掘調査対象区および黒草遺跡A地区の立地する台地は、清武川の支流山下川と元野の村落を貫流する河川にはさまれた、標高180~190mの台地である。鷹塚山山麓の北先端部にあたり、ほぼ南北に延びる台地である。黒草遺跡A地区は、この台地上でも北部に位置し、遺跡の立地する傾斜は北向きとなっている。しかし、「台地の先端がやや丘陵状をなし、周囲よりいくぶん標高が高くなっているため、先端部よりやや南方に位置する本遺跡は南に向かってゆるやかな斜面上に立地していて北向きであるがゆえの生活の不利な条件を緩和しているようである」とする宮大史研考古学班の観察は比較的まとめていているといえる。ただ、厳密には黒草遺跡A地区の南方にもかつて丘陵状の高所の場所があり、従って同地区は北方の台地先端の丘陵と南方の丘陵との間に包まれるような地形にあり、さらに北西方向に元野の村落に向けて傾斜する地形にあり、北西方向と南方向の傾斜のねじれ部分にひらけた遺跡と考えられる。現在、黒草遺跡A地区には、畠地2枚程に濃密な遺物の散乱がみられ、表探によっても多数の遺物を採集することが出来た。

さて、今回の発掘調査の対象区も、どちらかといえば北向き、ないしは北西向きの地形が多く、遺跡の立地としてはあまり好ましいものとはいえないまでも、地形的特徴を考慮すれば、さほど不利な立地条件ではなかった。しかし、後述する如く、各所耕作整備のための削平が著しく、かんばしい成果は期待出来なかった。

3. 調査の経過

本遺跡の発掘調査は、第1次を9月8日~28日(15日間)、第2次を10月18日~28日(10日間)とし、合計25日間にわたって実施した。

以下、調査日誌より調査の経過とその摘要を記す。

〈第1次〉

9月8日(金) I地区に4×4mのグリッド設定。合計5ヶ所あける。アカホヤ(第1オレンジ)層上面までの土層薄く、縄文後期の包含の可能性はうすい。D-5、C-4の各グリッドより石器・縄文前期(「曾根式」系)土器口縁部片出土。

9月9日(土) I地区発掘。出土は土器細片・石器剝片のみに限る。I地区内における地形的傾斜確認のため、C-17グリッドをあける。

9月11日(月) 9日の発掘区掘り下げ。アカホヤ(第1オレンジ)層まで。Cトレンチをさらに東側の道路ぎわまで延長、C-25グリッドを発掘。黒色土層(約90cm)が厚くなり、道路に向かって地層が下向していることが確認された。

9月12日(火) 黒色土層の厚い道路ぎわに集中して発掘。しかし、依然出土遺物は少量ないし細片に限られる。

9月13日(水) 前日に引き続き拡張。変化なし。

9月14日(木) セクション実測及び今日までの発掘区の埋め戻し。

9月18日(月) Ⅱ・Ⅲ地区を設定。午後よりⅣ地区に試掘を入れる。Ⅲ地区、褐色土層まで削平されている。出土遺物なし。Ⅴ地区より胴部から口縁部をそなえた縄文晚期土器検出。わずかに残った黒色土層に含まれ、褐色土層上面にへばり付いた出土状態。Ⅳ地区、褐色土層も削平され、アカホヤ(第1オレンジ)層にも乱れを生じている。Ⅴ地区にて地層確認のため1m70cm程の深さまで掘り下げ、觀察溝をもうける。

9月19日(火) Ⅲ地区拡張。余り成果なし。宮崎大学教育学部地学研究室遠藤尚教授、地質調査のため来訪する。Ⅱ地区、セクション実測。

9月20日(水) Ⅴ地区設定。しかし、これまでの調査区とほぼ同じく包含層認められず。Ⅰ地区埋め戻し。

9月21日(木) Ⅴ地区、アカホヤ(第1オレンジ)層下まで掘り下げ。Ⅱ地区埋め戻し。

9月22日(金) Ⅴ地区、グリッド拡張。口縁部土器片の出土をみとめる。Ⅴ地区セクション実測。

9月25日(月) Ⅴ地区より、黒色磨研土器及び条痕文をもつ胴部破片を出土。出土点数としては多くなったが、いずれも明瞭な包含状態としては考えられない。

9月26日(火) Ⅴ地区より円形土坑検出。精査の結果、近世以降の土坑と考えられる。

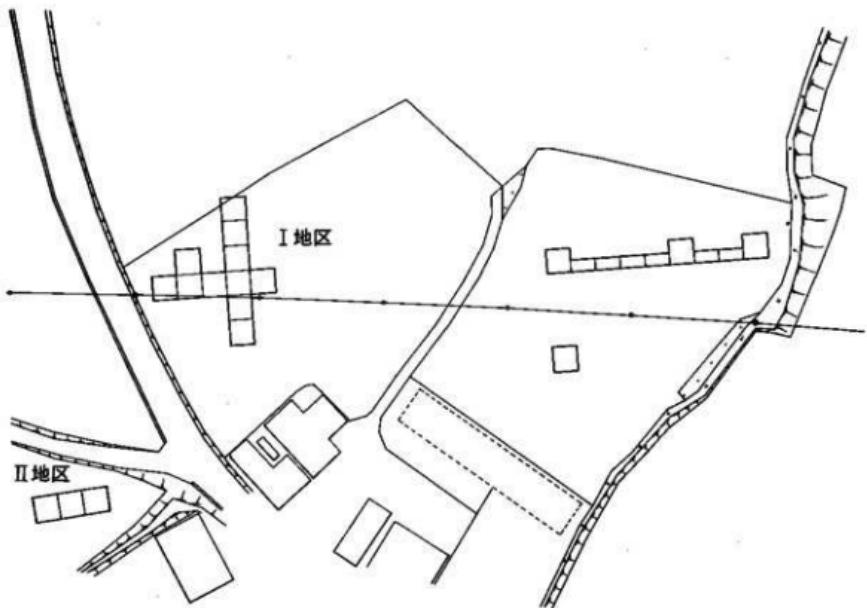
9月27日(水) Ⅴ地区、黒色磨研土器片、縄文施文土器片を検出。

9月28日(木) 前日に引き続き掘り下げ。打製石器出土。本日で第1次調査終了。

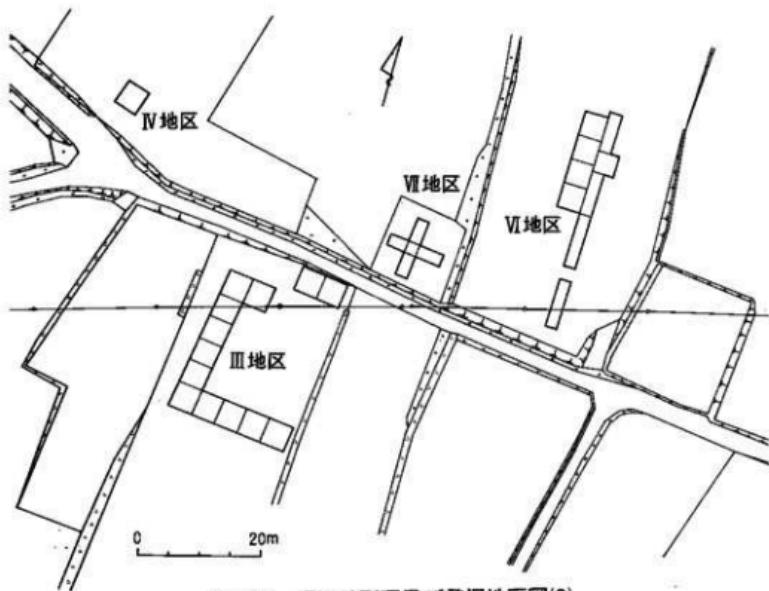
〈第2次〉

10月18日(水) 第2次調査開始。器材搬入、テント設営。Ⅴ地区、剝片・土器細片のみ。表土(約15cm)、アカホヤ(第1オレンジ)層(約15cm)、以下黒色硬質土層。

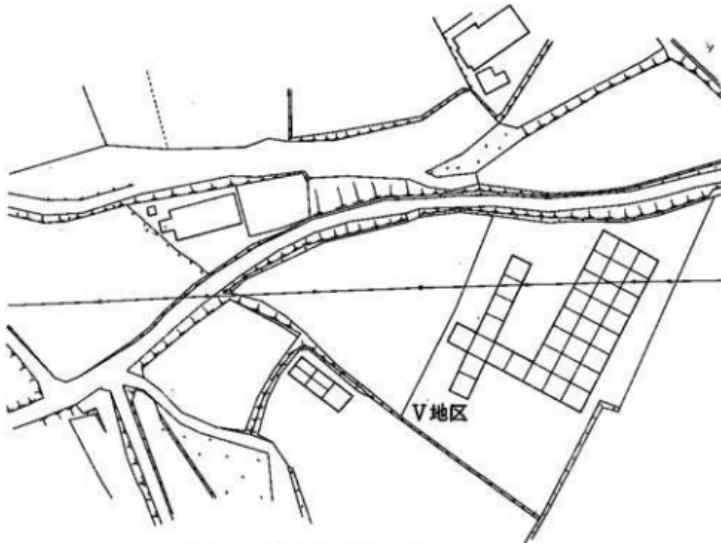
10月19日(木) Ⅴ地区、依然として成果なし。午後よりⅥ地区にトレンチ設定。比較的良好な状態での土器片の出土をみとめる。地層上からも今回の調査区内では最も良く自然層ないしは包含層が残っており、期待がもたれる。耕土(表



第2図 周辺地形図及び発掘地区図(1)



第3図 周辺地形図及び発掘地区図(2)



第4図 周辺地形図及び発掘地区図(3)

土約50cm)、黒色土層(約20~40cm)、以下褐色土層である。現在のところ、遺物の出土は黒色土層~褐色土層間でみとめられる。地形的には、今までの調査区より一段低位にあり、いわゆる「谷」を成した地点かと考えられる。

10月20日(金) V地区、前日に引き続き掘り下げ。出土状態もやや密になる。打製石器出土。

10月21日(土) VI地区においてまとまった遺物の出土が期待出来るとして、4×4mグリッドをあらたに4ヶ所設定し試掘発掘することにする。

10月23日(月) 先週に引き続き、掘り下げ。薄手の茎生式土器と思われる土器片出土。

10月24日(火) 掘り下げ。やや出土点数が限られてくる。打製石器、粘板岩質及びチャート質のもの各々1点。今一つ出土遺物の広がりに欠け、遺跡面の検出の可能性薄れる。

10月25日(水) 前日に引き続き掘り下げ。打製石器及び土器片出土。V地区を設定し、土層観察。

10月26日(木) V地区の南側の高い段に向けて2×8mのトレーニングを2本入れ。VI地区の北に向けての傾斜を検索。「曾煙式」系土器・「指宿式」ないしは「綫式」の土器片等を出土。打製石器1点。

10月27日(金) 前日に引き続き掘り下げ。底部を欠くが1個分と思われる後期土器検出。全体的な出土状態の広がりには欠けるが、後期の生活層は想定出来そうである。

10月28日(土) VI地区、最終的な掘り下げ。「曾煙式」系口縁部片出土。午後、滑溜の後写真撮影。

主要部の10分の1の実測、及び100分の1の平板実測。出土遺物取り上げの後、再度後さえ。

本日で全調査日程終了。

4. 包含層の状態と各地区的概況

本調査対象区内における基本的な土層は次の通りである。

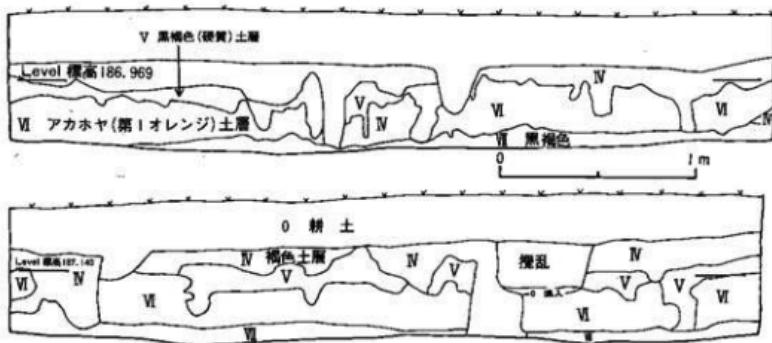
- I. 耕土(表土)
- II. 黒色土層
- III. 黑褐色土層
- IV. 褐色(アカホヤ混入)土層
- V. 黑褐色(硬質)土層
- VI. アカホヤ(第1オレンジ)層
- VII. 黑褐色(アカホヤ混入。Vに比べサラサラしている)土層
- VIII. 淡褐色土層
- IX. 淡褐色(第2オレンジ混入)土層

以下、第2オレンジ層と統く。これに基づいて各地区的包含層の状態と出土状態の概況について以下に記す。

I 地区

黒草遺跡A地区に最も近い地形にある地区であり、黒草遺跡A地区の広がりの可能性又はその外郭遺跡の可能性が当初考慮された。しかし、地元住民の話しあり地図によると、この地区的西部は丘陵状に一段高い地形を成しており、西部においてはI~IV層までが削平されていた(第5図)。土層図にみる如くIV層以下の乱れも著しく、近時の擾乱ではないにしろ、地形上生じる土の動きによって擾乱された場所かと考えられる。「曾煙式」系土器口縁部片(第10図1)及び石匙(第14図1)と共に、「下弓田式」土器片(第12図1)もIV層・褐色(アカホヤ混入)土層から出土しており、このことを裏付けている。

西から東へ傾斜をもち、東部においてはⅠ～Ⅲ層も認めることは出来たが、出土遺物は少なく又遺構面の検出も出来なかった。

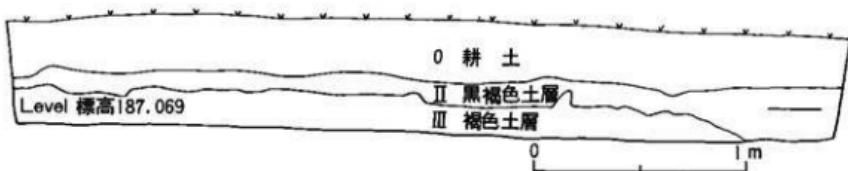


第5図 I地区土層実測図(D-4東壁・上、南壁・下)

II地区

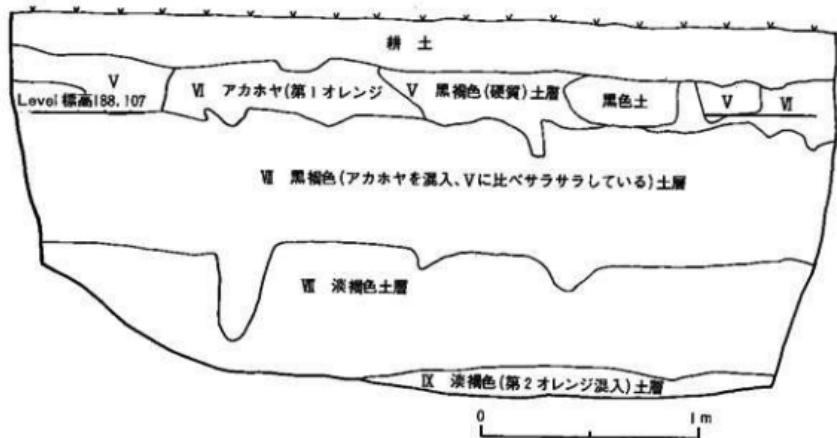
この地区はI地区より一層削平が著しく、Ⅰ～Ⅲ層はもとよりⅣ層も大半は削平されており、出土遺物も認められていない。

III地区



第6図 III地区晩期土器出土グリッド西壁土層実測図

この地区からは、晩期土器(第14図)を出土しているが、第6図の上層図におけるⅢ層上面にへばりついた状態で出土をみている。このように、北部にはわずかにⅡ層が残っていたものの、南部では第5図にみるようにⅠ～Ⅲ層が削平され、Ⅳ～Ⅵ層までも著しく乱れていた。Ⅶ層の黒褐色土層は、Ⅱ層のアカホヤを混入しない層及びV層の硬質層とも異なり、アカホヤを混入しサラサラとした感触をもつ土層である。Ⅷ層の淡褐色土層はやや粘質性のものである。



第7図 III地区土層実測図

IV地区

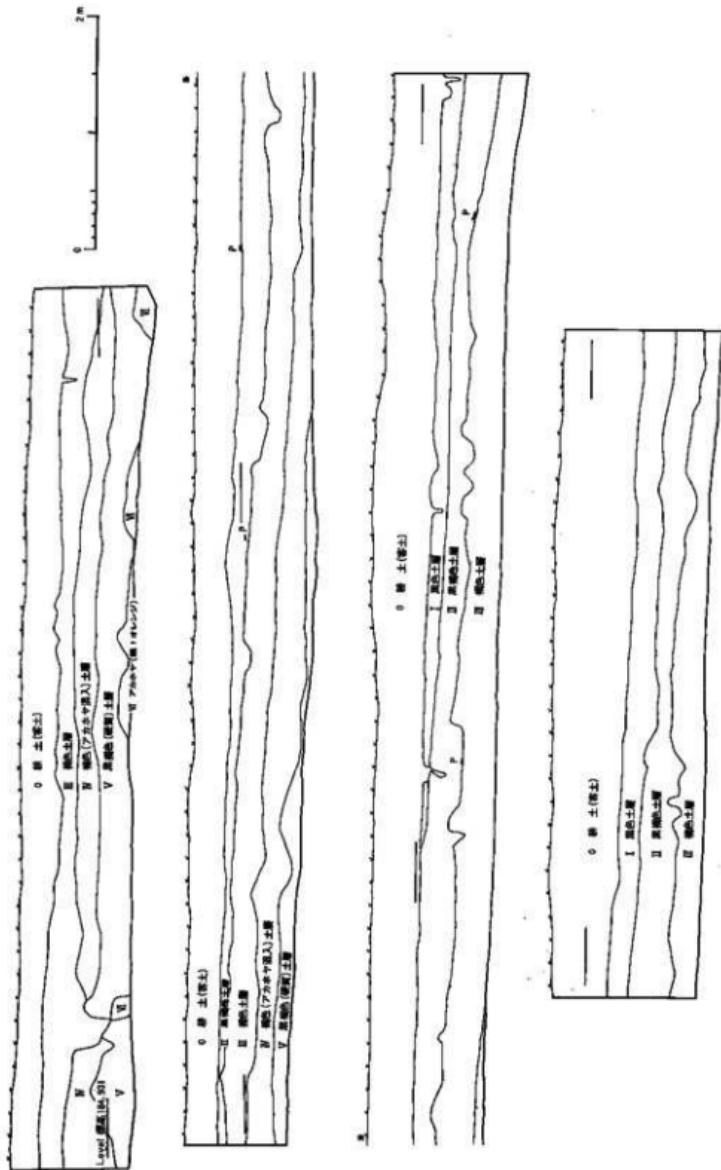
全体的な地形を知るために試掘程度にもうけたグリッドであるが、I～V層まで削平されており、耕土（表土）下はⅣ層・アカホヤ（第1オレンジ）層となる。出土遺物も認められなかった。

V地区

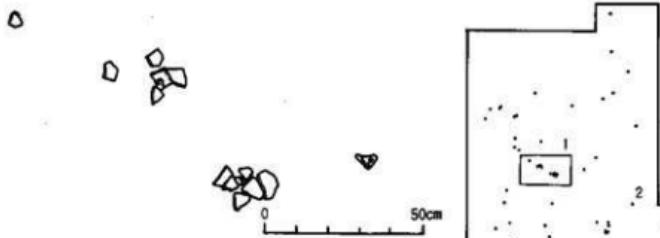
石器他 第10図2の土器片、第12図2の後期土器の出土をみとめたが、この地区も同じくI～Ⅲ層はされ、Ⅳ層自体も大半は削平されていた。西部のやや小高い所になるとⅣ層も削平されており、遺物の出土も認められなかった。

VI地区

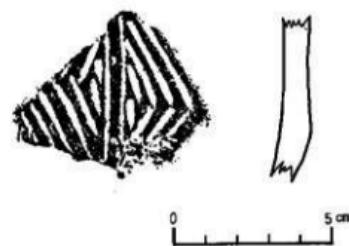
この地区が、本調査においては最も良好な遺物の出土をみとめた地区であった（第9図）。上層図にみると如く、南から北へと傾斜し、東西にはこの地区を中心に凹むといった「谷」地形にあり、好都合にも北部において包含層の状態が観察出来た。出土遺物は変化にとみ、「曾畠式」土器片（第4図2・3）、「綾A式」土器片（第9図1・第11図）、弥生式土器片の出土をみている。それぞれの出土層にはあまり変化はなく、第9図3の「曾畠式」土器片がⅣ層であった他は、Ⅳ層中に包含されており、層位的にこれらを識別することは出来ない。従って、「谷」地形における流土によってこの地区は形成され、多くの遺物はこの流土の産物と考えられる。しかし、この中で「綾A式」土器は比較的まとまった形で出土しており（第9図1）、比較的地勢の安定した一時期、短期間ではあるにしろ生活が営まれたことの推測は可能である。



第8図 VI地区土層実測図



1. 後期土器出土状態実測図



2. 「曾畠式」土器実測図・拓影



3. 「曾畠式」土器実測図・拓影

第9図 VI地区の遺物出土状況図

V地区

V地区の地形的位置を確認するために発掘区を設定した。I～V層はもとより、VI層の大半も削平され、遺物の出土は全く認められなかった。

5. 遺物

(1) 土器

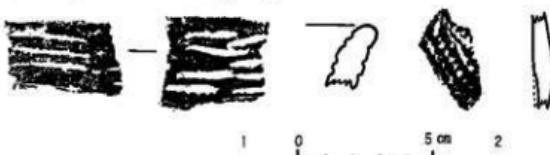
今回の調査では、縄文前期・後期・晩期土器片及び弥生式土器片の検出をみた。しかし、出土土器少
量なのに正比例して特徴の明瞭なものの多くわめて限られたものであった。それぞれ出土の概況について
は前述したので、ここでは時期・型式別に出土土器について述べる。

縄文前期土器

(a) 「曾畠式」系土器 (第

9図2・3、第10図1)

第7図2は、いわゆる「菱形文」の施文(文様)構成をもつ



もので、焼成はあまり良くない。

第10図 縄文前期土器実測図・拓影

表は黒褐色～黒色を呈し、裏は黄褐色を示す。胎土に滑石砂を含み、文様にはやや乱れがみられる器
形は深鉢形。

第9図3は、施文(文様)構成として、表を二列列点文プラス横線文プラス縦線文により、裏は口縁
部のみに二列列点文を施文。表裏とも条痕文を明瞭に残している。表に施文された縦線文については、
その文様構成全様を判断しかねるが、やや斜行施文である。施文構成としては、わりあい整ったものと
いえる。胎土に滑石砂を含み、焼成は良好であり、表は黒色、裏は黄褐色を呈し、深鉢形と考えられる。

第10図1は、表裏にいわゆる「短縦列文」を配したもので、施文具は、表の方が裏の施文具に比して
細いものと思われる。滑石砂を含み、焼成は良好で、表裏とも黒褐色～黒色を呈し、浅鉢形をなすもの
と考えられる。施文(文様)構成には乱れがみられる。

(b) 前期土器 (第10図2)

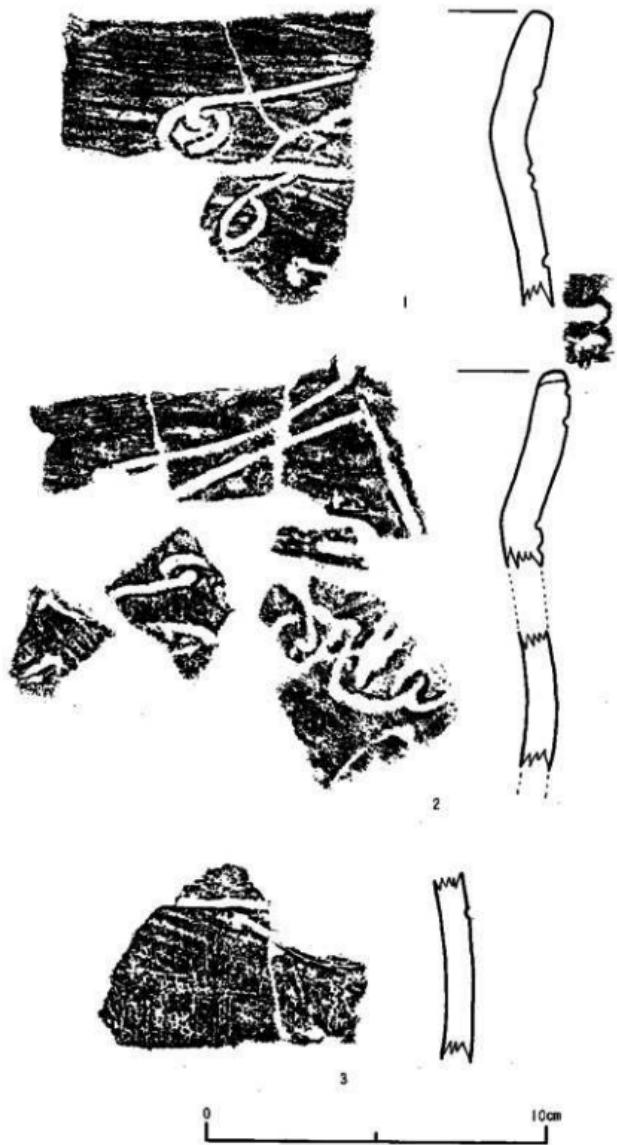
前期土器片は細片二点であるが、内一片は器面の剥落が著しく実測することは出来なかった。褐色を
呈し、石英砂を胎土に混じて焼成は良好である。

縄文後期土器

(a) 「綾A式」土器 (第11図1～3)

1と3は同一個体である。この土器は比較的まとまって出土し(第9図1)、一個体に復元出来るかと思
われたが、底部をはじめ多くの部位を欠いたため、ここでは断片資料として取り上げておいた。山形
口縁をなすものとみられ、石砂粒を胎土に混じえ、焼成は良好で、表裏とも茶褐色を呈し、口縁部付近
に若干の煤の付着がみとめられる。施文は、条痕文を地文としヘラ状の施文具で巻毛状文を施すもの
であるが、3にみると条痕文は口縁部に限られており、また施文(文様)構成もそれ以下には及んで
いない。胴部より口縁部に若干の肥厚化が認められ、肥厚した口縁は外反している。

2もまた前者と同じく断片資料であるが、いずれも同一個体と思われるため一括して掲げた。淡褐色



第11図 縄文後期土器実測図・拓影

を呈し、石砂粒を胎土に混じえ、焼成は良好である。山形口縁をなすが、条痕文の地文はみとめられない。施文（文様）構成の復元は、これだけの破片からは不可能であるが、山形口縁の「山」の口唇部に刻みをもち、口縁部の直線的な沈線文と、脇部にかけた複雑なからみをもつ曲線文によって文様を構成するものとみられる。前者と同じく、煤の付着がみとめられる。

(b) 「下弓田式」土器（第12図1・2）

1は、隆起帯の上面に巻貝の尻

による圧痕と思われる列点文をもち、上部には同じ施文具によるものとみられる深く幅広の沈線をもつものである。表裏に条痕文を残しており、色調は赤褐色を呈し、石英砂を胎土に混じえて、焼成は比較的良い。

2は、横位の沈線を施した後刺突文を施したもので、表は黒褐色、裏は褐色を呈している。胎土に石英砂を混じて、焼成も良い。

(c) その他（第12図4・5）

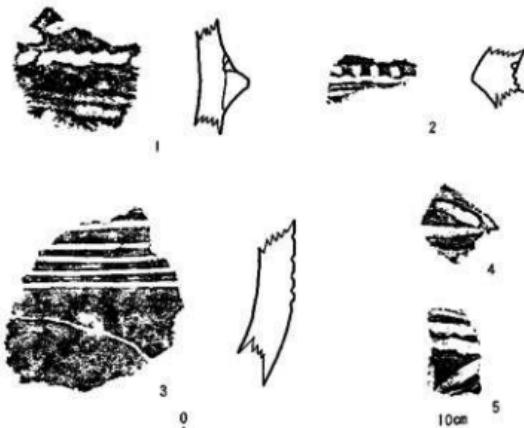
これらは同一個体のものと思われるが、断片的な細片のみ検出されている。器壁はわりに薄手で、表裏とも黒色を呈している。曲線化した沈線は幅広であり、施文の仕方も粗雑である。「阿高式」的なものとみるよりは「綾式」の範疇に入るるべきであろう。

縄文晩期土器

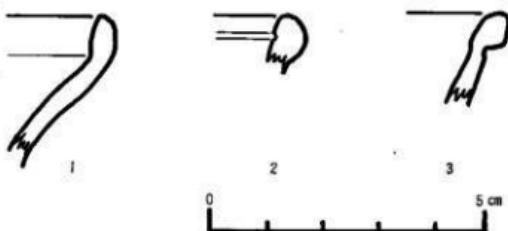
(a) 黒色磨研土器（第12図3、第13図1～3）

第12図3は、厚手の破片の全面に煤を付着したもので、黒色～黒褐色を呈した磨研土器である。焼成は良好である。破片からは5条の沈線を確認することが出来る。

第13図1～3は、いずれも細片で径の計測も困難、浅鉢形の磨研土器である。1は表裏とも黒褐色を呈し、断面は灰色、焼成は良好であるが、磨研は粗い。微細石砂粒を含んでいる。2は黒褐色、3は白黄色（裏は黒褐色）を呈し、2は口縁内に細沈線をもっている。これらは、いわゆる「御領式」系の晩期黒色磨研土器として分類出



第12図 縄文後期土器その他実測図・拓影



第13図 縄文磨研土器実測図

来る。

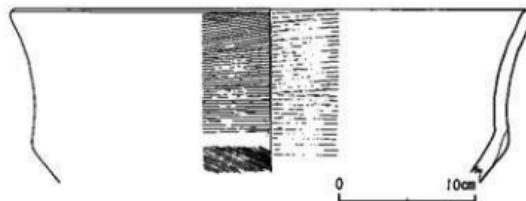
(b) 深鉢形土器 (第14図)

表裏に条痕文を残す深鉢形の晩期土器である。腹部最大径下には細線条痕がみられる。胎土には多量の石砂粒を混じえ、口縁部付近に煤を付着させている。表は黒褐色、裏は褐色を呈し、下部には炭化物を付着させている。非常に器面は荒く、焼成もさほど良いとはいえない。

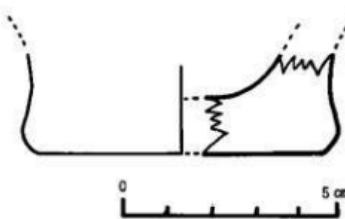
長崎市深堀町の深堀遺跡出土土器に近似のものがある。いわゆる「黒川式」における粗製深鉢形土器の流れが考えられる。

底部 (第15図)

底部片はこの一点をみとめるのみである。白黄色を呈し、胎土に石砂粒を多量に混じえ、脆い。この底部片の胎土・色調等に近いものは、「綾A式」としてかかけた土器でおそらく「綾A式」にともなうものと考えられる。



第14図 繩文晩期深鉢形土器実測図

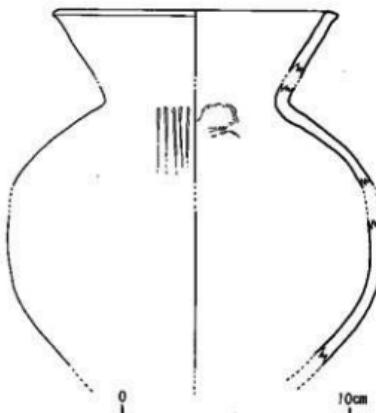


第15図 底部実測図

弥生式土器 (第16図)

細片からの復元図で、大きさの測定は実証に乏しいが、広口の壺形土器を成すと考えられたものである。表は淡褐色、裏は淡黒褐色を呈し、細かな砂粒を胎土に混じえている。焼成は良好である。表の調整は明瞭ではないが、削りによって調整し肩部から頸部にかけての内面の成形は指頭による。

弥生式土器の内でも終末に近いものと考えられる。



第16図 弥生式土器実測図

(2) 石 器

(a) 石 匙 (第17図)

つまみの比較的大きな横形の石匙である。つまみ上部に打面をもち、刃部の主要部に表から剥離が加えられている。つまみ部の抉り込みも明瞭につけられており、比較的安定した形を保っている。石質はチャートである。

(b) 打製石鎌 (第17図2~8)

今回検出したものには三種の形状を認め得る。長二等辺三角形(3)、五角形(2、4、8)、長脚形(5~7)であり、五角形のものの内、4をその変形とみなし、長脚形のものの内、7をその変形とみなす。

長二等辺三角形のものは1点のみの採集であるが、両面よりかなり細かな調整剥離が行なわれており基部抉入もはっきりしている。

五角形の形状を示すものはみな基部抉入がゆるやかで、0.1cmを計測した。2は、肩部が低く、両側は1cmを計る。刃部の剥離は両面とも片側に集中的に行なわれている。4は、2とは逆に肩部が先端部に上がっている。刃部は細かく調整剥離されている。8は、肩部の位置を2と4の中間位程にもつもので、両側は1.4cmを計り、両側部はゆるやかな抉入を見る。調整剥離は3点の内最も緻密である。

長脚形としたものは、基部抉入が全長の21%~25%のものをあげ、5・6は同一型式のものとみなした。

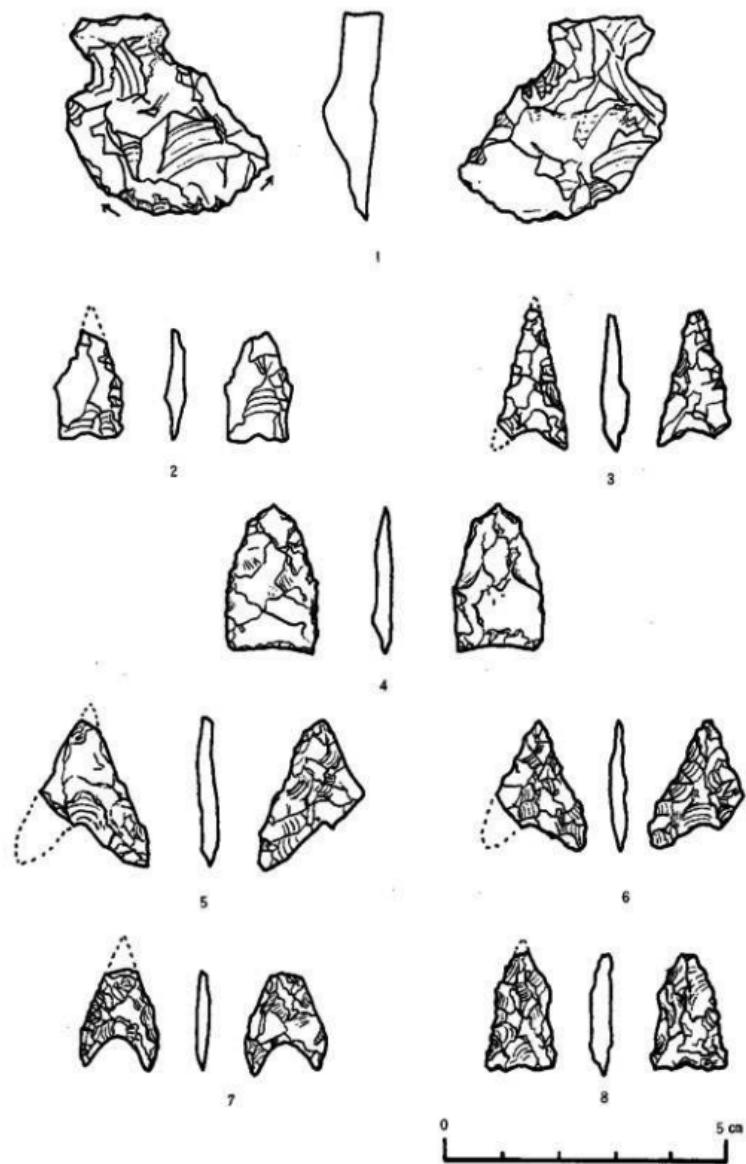
両者とも刃部の調整剥離はややおおまかに行なわれており、基部抉入の剥離面を大きく抉入部に残している。7は、5・6とやや形状を異にし、脚部先端が鋭角に尖っている。剥離も単に刃部を作り出すのみではなく、両面にまんべんなく緻密で細かな調整が行なわれ、厚さも薄手に仕上げられている。

石質及びそれぞれの計測値については下表の通りである。

打製石鎌一覧表

単位(cm)

番号	石 質	出 土 層	形 状	全 長	厚 さ	基 部 幅	基 部 抜 入
2	チャート	褐色 (?)	五 角 形	(2.3)	0.4	1.1	0.1
3	々	赤ホヤ上面	長二等辺三角形	(2.7)	0.5	(1.3)	0.3
4	粘 板 岩	褐色 中層	五 角 形	2.5	0.3	1.0	0.1
5	チャート	褐色 下層	長 脚	(2.8)	0.3	(2.3)	0.7
6	々	褐色 下層	々	2.3	0.3	(1.8)	0.5
7	黒 輝 石	褐色 上層	々	(2.3)	0.2	1.4	0.5
8	チャート	褐色 中層	五 角 形	(2.3)	0.4	1.3	0.1



第17図 石匙(1)、石鎌(2~8)実測図

6. 結語

以上記してきた如く、今回の調査対象区内においては何らの造構も認め得ず、検出し得た遺物も多くはその生活跡としての原位置的なものから逸脱したものであった。しかし、⁽¹⁾地区において確認された如く、一時期的なものであれ生活跡の痕跡を推察することは可能である。ただ、それが遺跡として取り上げられるには、決定的な遺跡的性格の確証が得られなかつたというだけである。

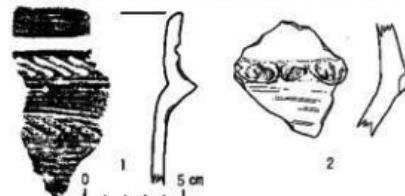
黒草遺跡A地区を中心とする黒草遺跡の範囲と規模は未だ明らかではないが、縄文前期から弥生時代にいたる生活がこの地において営なまれたであろうことは今回の成果からも推察できる。おそらく、黒草遺跡A地区を縄文後期から晩期に至る時期の主体地であると考えるならば、その周辺には時期時期の生活様式を刻む生活面が存在したであろう。

「曾畠式」については、今回検出されたそれは、施文（文様）構成に乱れの生じる時期の所産と考えられ、いわゆる「第2類」～「第3類」に相当させうるものである。従来、その分布が希薄であるといわれてきた「曾畠式」も、灰塚遺跡・平木場遺跡・柿川内第1遺跡等々近年その出土例も増加しており、分布圏の再考は必至のものとなってきた。

さて、縄文後期になると、「綾式」を中心とした後期遺跡が黒草遺跡A地区を主体とした中で形成されたことは、過去の調査あるいは表面採集からも理解される。「綾式」土器については、田中熊雄氏による厳密な分類があり、それによると今回調査区内⁽¹⁾地区出土のものは「第5類、四線文飾土器」にあたり、黒草遺跡A地区出土のものは列点文、貝殻文、沈線文を復合構成するものが多く、第2類・第6類等が相当する。「綾式」土器の型式設定については、今日でも大きな混乱がみられ、小林久雄氏がA・Bの2類に細分されて以来、「指宿式」との関連も含め、事態は收拾されていない。賀川光夫氏は、「指宿式」～「綾A式」とし、同時期の所産としての「綾B式」を認められた上に「綾C式」の設定を提出している。一方、乙益重隆・前川威洋両氏は、「綾A・B式」を同時期のセットをなすものとされ、その分布圏を宮崎県南部に限定されている。ここでは「指宿式」～「綾A式」の直截な公式はない。二者の型式設定には微妙な違いがあり、そしてその要因はもっぱら前後型式との関連、及び分布圏の問題にかかわっている。今一つの後期土器である「下弓田式」については、今回の調査から得られた資料は少なくただ黒草遺跡総体の中で決して「下弓田式」の位置は希薄なものではなく、より主要なる位置をもって形成された時期があることを示唆するのみである。第18図1は地元の人から提供を受けた黒草遺跡A地区的表探資料であるが、作りのきわめて精緻な「下弓田式」土器である。貝殻条痕文を地文とし、幅広で深い凹線にヘラ描きと貝殻腹縁による列文を構成したもので、研磨した如くに赤褐色を呈している。

さて、今一つ黒草遺跡A地区的表探資料として、第18図2を上げておこうと思う。今回の調査において縄文晩期土器としては、粗い貝殻条痕文を残す深鉢形土器と黑色磨研土器をみているが、この土器片は「夜臼式」系統のものとも思われる。器形としては、肩部が

「く」の字に折れる深鉢形で、褐色を呈し、貼付突帯には指頭によるものと考えられる刻み目を施している。



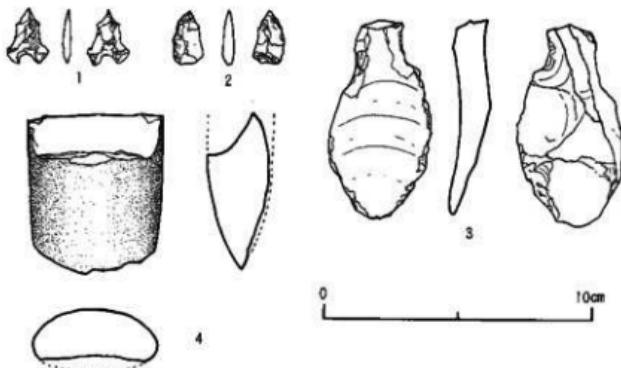
第18図 黒草遺跡A地区表探土器実測図

このタイプは確かに「夜臼式」にみえるが、第12図の深鉢形土器が「黒川式」系統のものに近いようにその時期的なものを考慮するならば、むしろ厳密には「山ノ寺式」に近いものとみなした方がよからうと思う。

さて、石器類については、それぞれの石器類の共伴関係に今一つの明瞭さを欠き確定は出来ない。I地区より出土した石匙は一応「曾畠式」に伴なうものとみ、黒草遺跡A地区の表探である第19図3は粘板岩製の粗大な後期の所産とみられる。石鏃については、第19図1・2(1.チャート・2.粘板岩)の内1のタイプはかつての黒草遺跡A地区的発掘においても類似例が出土しており、又2も今回の調査において五角形の形状をもつものとして分類したものに想当させうる。

以上の如く断片的な資料ではあったが、今日より一層擾乱の続くまま放置されている黒草遺跡A地区的再考の手がかりになるとともに、ことに前期土器に一資料を加えることが出来たことは意義あることであると思う。

(北郷泰道)



第19図 黒草遺跡A地区表探石器

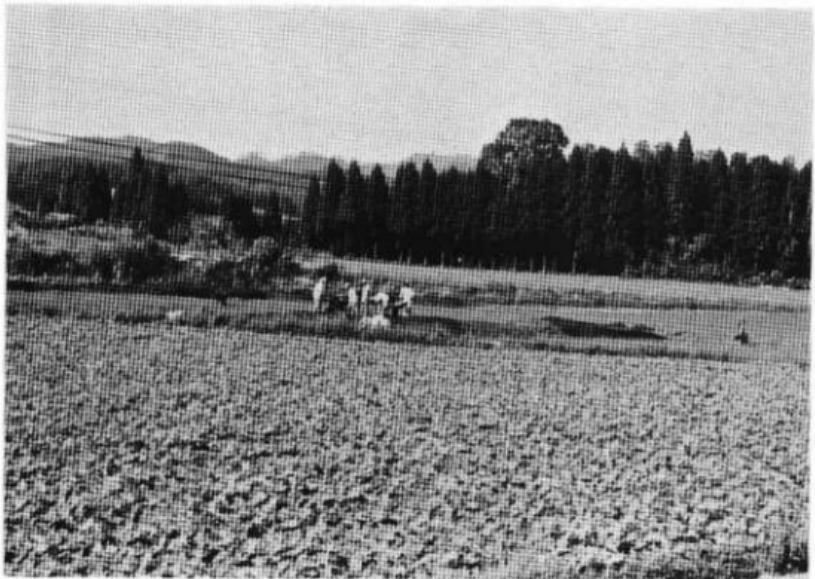
- 注 (1) 杉村彰一「曾畠式土器考」「九州の原始文様」佐賀県立博物館(昭和52年)
(2) 「灰塚遺跡」九州総合自動車道埋蔵文化財調査報告(2)宮崎県教育委員会(昭和49年)
(3) 「九州総合自動車道埋蔵文化財調査報告(1)」宮崎県教育委員会(昭和48年)
(4) 「柿内川第Ⅰ遺跡・柿川内第Ⅱ遺跡」宮崎県教育委員会(昭和52年)
(5) 田中能雄「綾町尾立遺跡の研究(1)(2)」「宮崎大学学芸学部紀要」第13号(昭和37年)
(6) 小林久雄「九州の縄文土器」「人類学 史学講座」(昭和14年)
(7) (1)に同じ。P 277。
(8) 乙益重隆・前川威洋「九州」「新版考古学講座」3先史文化

参考文献

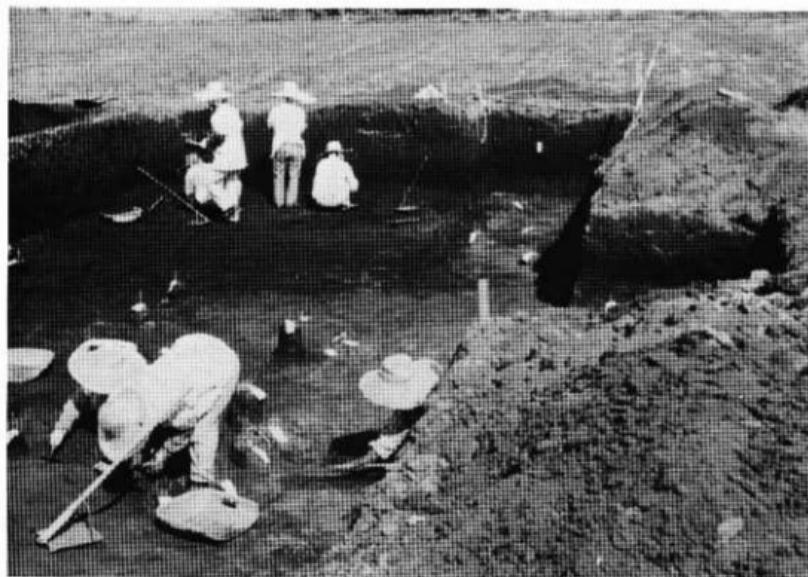
坂田邦洋「江須貝塚」(昭和48年)「尾田貝塚」(昭和49年)



(1) 調査区遠景



(2) VI地区近景



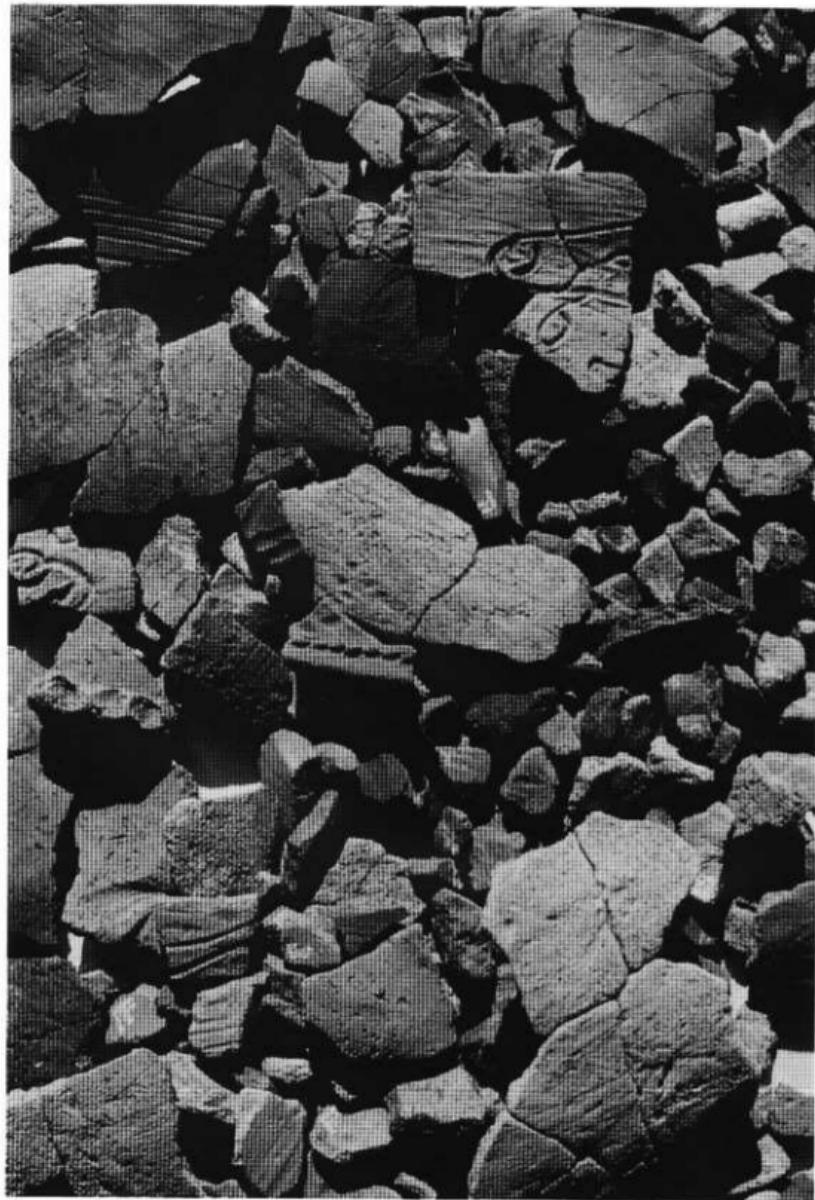
(1) VI地区発掘風景



(2) VI地区「縹式」土器出土状況



VI地区土層

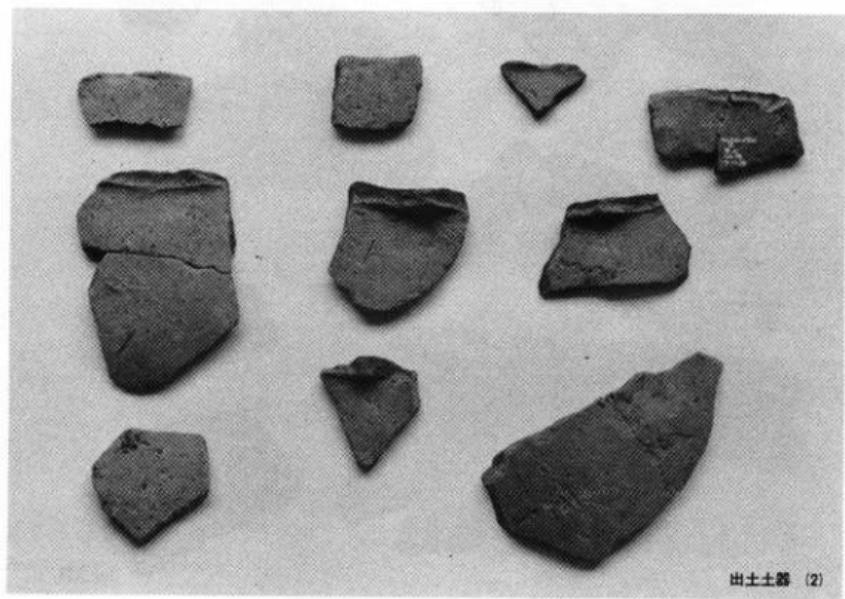


遺物群



出土土器 (1)

図版6





石器

VI. 清武町の歴史的概観

宮崎郡清武町は宮崎市の西部に接する町で、北部と西部の丘地を除いて平地が多く、西方田野町から流れて来た清武川は中野丘の西から南を巡って東流して日向灘に注いでいる。考古学的調査は未だ充分に行なわれていないが、表面採集による遺跡の数は多く、縄文期に属するものは船引上ノ原、同五反田、加納長峰、永山、上今泉、下中野などより採集され、弥生期のものは船引上ノ原 同地主、同養原、同正手、同瀬ノ上、加納、同福神屋敷、同寺屋敷、同下岩見田、南加納平野、今泉松尾寺境内、同大久保足ノ原、今泉勢田寺跡、同星野丸山、同松木ノ原などが數えられる。特に加納の福神屋敷は當て豪棺の破片を出した所として有名である。古墳は加納の下岩見田に前方後円墳1基と円墳2基、白沙坂に円墳1基が指定されている。

建久8年（1197）の「日向國田帳」には船曳50町は宇佐神宮の別当寺であった弥勒寺の領地で地頭は土持太郎信綱とあり、加納200町は八條女院暲子内親王の領地國富庄の1部で地頭は平五（平季基の子）とある。その後文安年間（1444—1448）には都於郡城主伊東氏の支族清武氏の領地であったが、清武城はその頃築城されたものと思われる。しかし清武美作守祐行が死亡して弟の左衛門太夫祐亮に譲ったのを都於郡の城主伊東祐堯がこれを取って領地とした。祐堯は文明17年（1485）に長男祐国と二男祐邑が、伊東氏の軒肥城を攻めたのをこの城まで見送った後この城で病死した。城内に祐堯の墓があり、麓に中野神社があり、祐堯を併祭している。その後伊東義祐が天正5年（1577）に島津氏に敗れてからは城は島津氏に帰したが、天正15年に豊臣秀吉が島津氏を征して九州を統一してからはまた伊東氏の有となり、川崎駿河守、福津掃部助らが城主となり、伊東氏はこの城に地頭を置いて清武地方を治めさせたが、元和元年（1615）に1国1城の令が出て城は廃せられた。

（石川恒太郎）

小原遺跡

宮崎郡清武町大字今泉小原

目 次

1. 位置と環境.....	187
2. 調査の経過.....	187
3. 調査の概要.....	190
4. 遺 物.....	193
5. 結 語.....	195

挿 図 目 次

第1図 グリッド配置図.....	188
第2図 G-8区南壁土層図.....	189
第3図 I-7区東壁土層図.....	189
第4図 出土遺物(1).....	191
第5図 出土遺物(2).....	192
第6図 出土遺物(3).....	194

図 版 目 次

図版1 (1). 遺跡遠景(北より).....	196
(2). 調査風景.....	196
図版2 出土遺物(1).....	197
図版3 出土遺物(2).....	198

1. 位置と環境

清武町は、県中央部に展開する宮崎平野の南端に位置する。この附近は、南那珂山地の北裾にあたり低丘陵が発達している。この丘陵は、南より北へ行くに従い低くなり、樹枝状を呈しており、丘陵間は、わりに急な傾斜をもつ谷となっている。清武地区と宮崎地区を分断する様に東へ延びている丘陵の南辺は清武川により浸蝕形成された浸蝕崖となっていて、北へは、低丘陵が大淀川へ向って延びている、この丘陵は、宮崎層群より成る丘陵で、部分的にシラスがのっている。シラスのある附近が丘陵の最高位となり、宮崎および清武の両地区を一望できる地点となっている。

清武町を貫流する清武川、岡川、水無川は、町中央部で合流後、東流して日向灘に注いでいる。この三河川流域には沖積地が開けているが、丘陵裾などには、沖積地と比高差2~3mの河岸段丘が形成されている。岡川流域においては、両岸に形成されており、また三河川の合流する地点の南東には、木原集落のある河岸段丘がみられる。

2. 調査の経過

小原遺跡は、宮崎郡清武町大字今泉字小原に所在する遺跡で、清武川と岡川に囲まれ、東へ突出している丘陵南裾に開ける標高32mの河岸段丘上にある。この河岸段丘は丘陵裾に半楕円形に延びていて、現在は果樹園となっている。段丘下の現水田との比高差は約4mあり、その南には岡川が東流している。九州縦貫自動車道は、丘陵を横断して通過する。

発掘調査は、昭和52年7月4日から同月6日まで一次調査、同年7月11日から同月30日まで本調査を行なった。

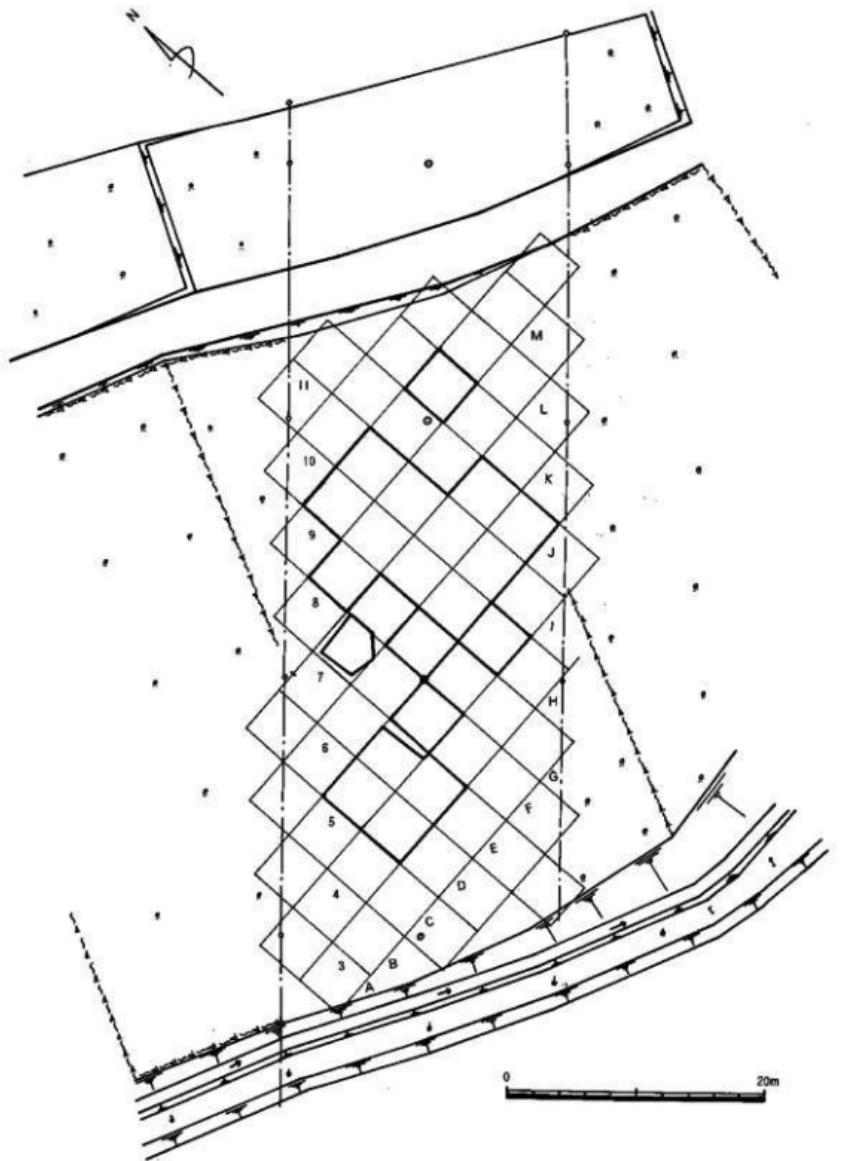
A. 一次調査（7月4日から7月6日）

調査は、路線が横断する丘陵上の東方畠地において、昭和47年の分布調査で土器片が採集されていたので、丘陵上より行なうこととした。包含層の有無と広がりをみるために、2m×2mの試掘坑を設定し調査を行なったが、遺物等は全く出土しなかった。丘陵上に散布する遺物は、この地点まで及んでいないことが確認された。段丘上の層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層第1オレンジ層、第Ⅳ層漆黒土層、第Ⅴ層褐色土層、第Ⅵ層黃褐色土層となっている。

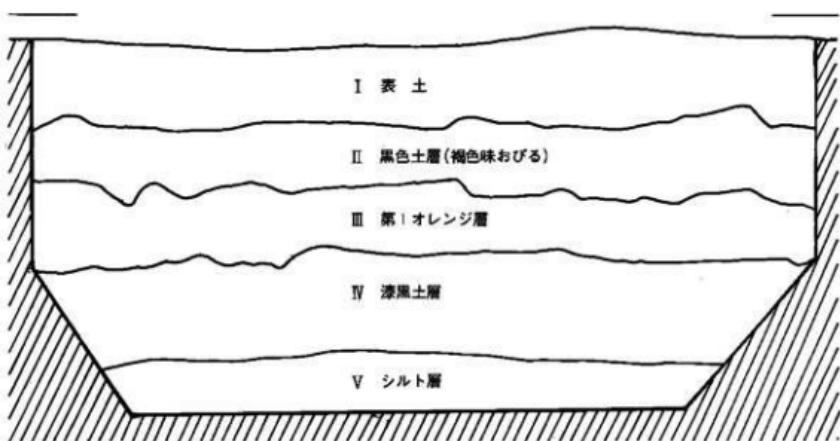
6日より、丘陵より15m下の河岸段丘上へ調査地を移動する。段丘端より30m以上の試掘坑にて、有肩打製石斧、凸幕をもつ縄文晩期の土器等が出土した。段丘上の層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層褐色土層をおびる黒色土層、第Ⅲ層第1オレンジ層、第Ⅳ層漆黒土層となっており、遺物は第Ⅱ層より出土している。本調査は、この段丘上を調査対象地とすることにした。

B. 本調査（7月11日から7月30日）

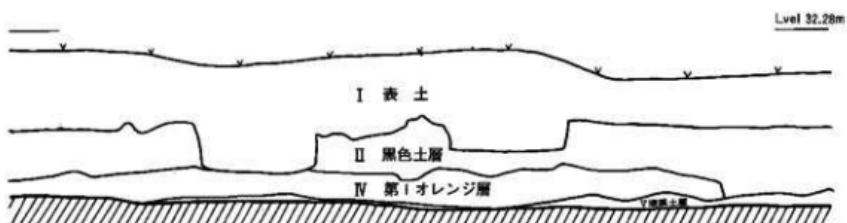
本調査は、7月11日より行ない、同日、グリット設定を行なう。グリットは、東西南北に沿って設定し、1区画4mとする。区画名は、東西、西よりA・B・C……、南北、南より1・2・3……とし1区画はA-1区と呼称することにする。同日は、みかんの株取りを行ない、12日より、段丘



第1図 グリット配置図



第2図 G-8区南壁土層図



第3図 I-7区東壁土層図

端附近、E・D-4区を中心に調査を進める。E-4区等において、縄文晩期の土器などが出土した。

14日より、H・J-7区など段丘端より30m附近の調査を進め、H-7区にて土師器片等が出土した。その後は、遺物の出土状況より調査区を拡張して行き、21日F-7区において、長方形プランの土括が検出されたが、埋土が赤ホヤ、黒灰色の混土であることより後世の貯蔵穴と判断した。この種の貯蔵穴は他の区画においても検出された。

24日までに、H-7、8、I-6、7、8、J-7区等の調査を行なう。遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、磁器等が出土するが、擾乱を受けているため同一層に混在している。土師器片は多く出土するが少片がほとんどである。25日、I-6区において、縄文晩期の土器片、敲石等が他遺物と混在せず出土している。

27日、セクション観察用の幅1mの調査区を東西、南北に設定し、調査を進めた。29日より宮崎大学連藤教授が調査に参加され、地層について調査を行なった。

30日、遺物取り上げおよび図面等を完成させ、調査を終了した。同日器材撤収を行なう。

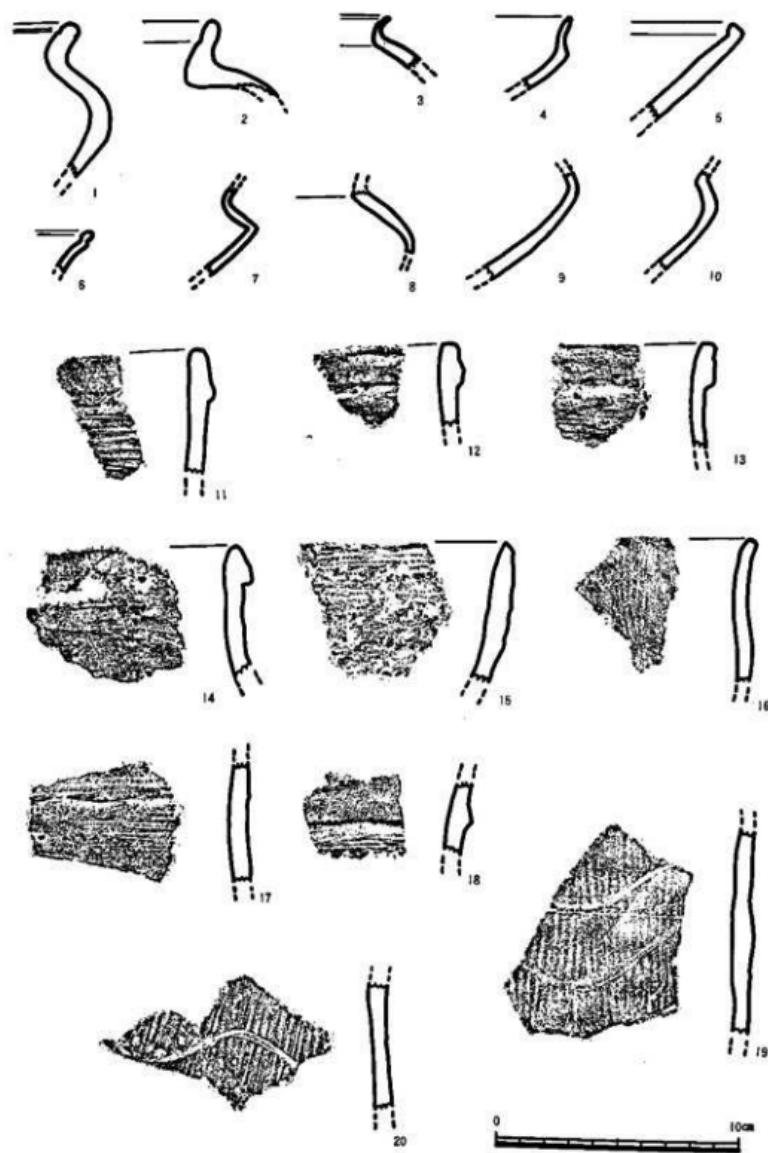
なお、遺物の出土地点などは50分の1で記録し、セクションは10分の1で記録した。

3. 調査の概要

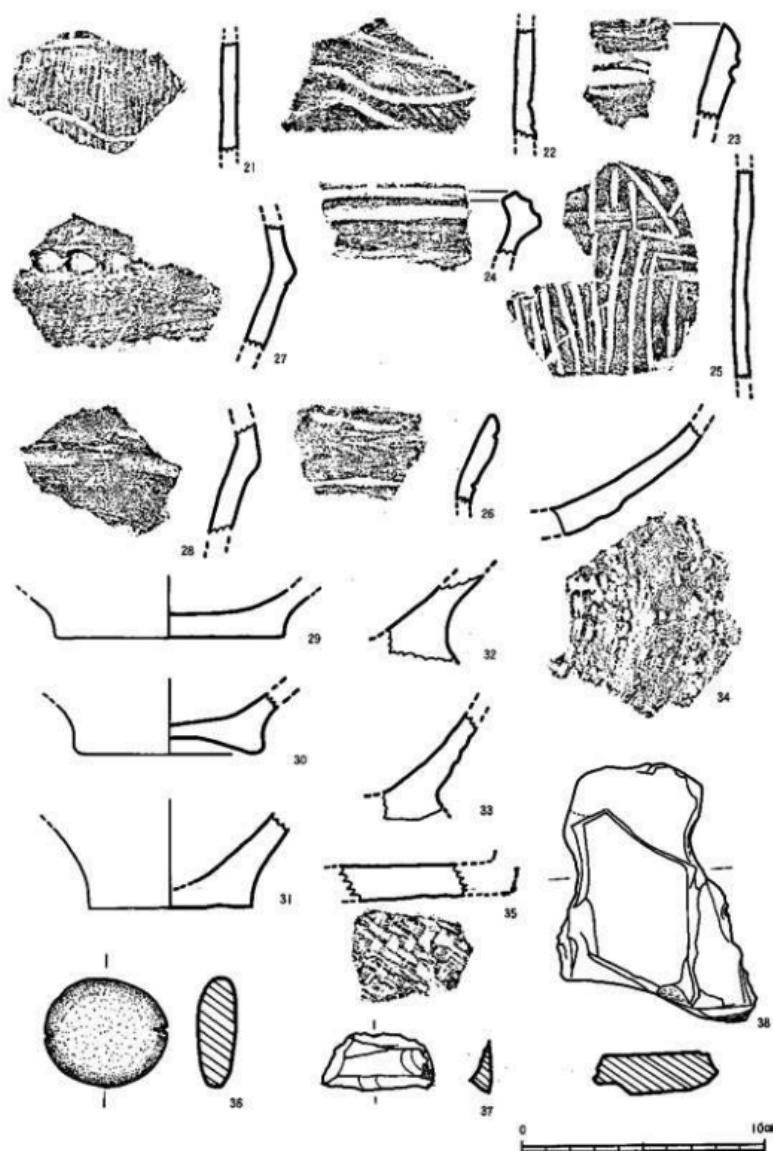
発掘調査は、SAT 493+20を基準として、東西南北の線に沿って4×4を1区画とするグリッドを設定し、調査を行なった。調査地の基本層序は、第Ⅰ層表土（耕土）、第Ⅱ層黒色土（褐色味を帯びる）第Ⅲ層第Ⅰオレンジ層、第Ⅳ層漆黒土層、第Ⅴ層シルト層となっているが、果樹園造成の際などにより第Ⅱ層ないし第Ⅲ層上層まで擾乱を受けている。層序を残していたのは、G-8、I-7区などと少ない。出土遺物は、縄文土器、須恵器、土師器、磁器などで、出土量は少ないが、特に遺物の出土したのは、I・J-6・7区周辺である。遺構としては、後世の60cm×220cm程の長方形プラン、径100cmの円形プランのイモなどの貯蔵穴が検出された以外、先の遺物の時期の遺構は検出されていない。

I・J-6・7区周辺は、段丘端よりほぼ30mの位置にあたる。出土遺物は、黒色磨研土器など縄文晩期、奈良以降の土師器、須恵器、明末青緑色の青磁、染付等が出土しているが、擾乱を受けているため遺物の出土状況は各時代のものが混在している。その中で、縄文晩期の遺物は、第Ⅱ層下層においては、縄文晩期の遺物が多く出土し、他の時代の遺物の混在が少ないとから、この層が縄文晩期の包含層かと考えられる。

段丘端附近のD・E-4区では、遺物の出土量は少ない。出土遺物には、黒色磨研土器、沈線文土器などが出土している。他の時代の遺物はほとんど出土していない。出土層は、第Ⅱ層下層にあたる。遺構としては、50cm×120cmの略長方形で深さ20cmほどの土壌が検出されたが、時期等は判別できなかった。



第4図 出土遺物(1)



第5図 出土遺物(2)

4. 遺物

A. 繩文土器

繩文土器は、精製土器と粗製土器があり、精製土器には、黒色磨研の浅鉢形土器がある、粗製土器は貝殻文を地文とし、口縁下に凸帯を巡らす土器、沈線文を施文する土器などがあり、いずれも繩文晩期に編年されている土器である。

第4図-1~10は、浅鉢形土器である。1・2は厚さが8mm前後とわりに厚く、口縁部はくの字形に屈折して短かく立ち上がる。口縁下の内外面に1条の沈線文がある。内外面ともよく研磨され、褐色ないし黄褐色を呈している。3は口縁部が外反し短かく立ち上がり、4は、稜をもち逆くの字形に口縁が開く。5は口縁端がタガ様に肥厚している口縁で、器面の調整はやや荒い。6は、黒色を呈するいわゆる黒色磨研の口縁である。7~10は浅鉢形土器の胴部で、黒色を呈し、肩部に明瞭な稜をもつ7の他は、肩部から胴部にかけて緩やかなカーブをもって底部へと続いている。8~10は、褐色ないし黒褐色を呈するが器面はヘラで研磨されている。

第4・5図-11~22は、貝殻文を地文とする粗製土器で、器形は深鉢形ないし変形である。11~14は、横走する貝殻条痕の地文を内外面にもち、内面の地文は指頭あるいはヘラ様のもので消している。11~13は口縁部に一条の凸帯をもつ。14の口縁肥厚部は、貼り付けである。一条の凸帯をもつ17・18の凸帯と11~12の凸帯とは趣きを異にしている。15は、貝殻で器面をかき削った風であらう調整である。16は、口縁部が緩かに外反し、縦位の浅い条痕を呈し、いずれも胎土に砂粒を含み、褐色ないし黄褐色を呈し、焼成は良い。

19~22は、縦走あるいは斜走の浅い貝殻条痕を地文とし、波状の沈線文が施文されている。貝殻条痕は外面のみで、内面はよく調整されている。胎土に細かい砂粒を含み、焼成はあまり良くない。

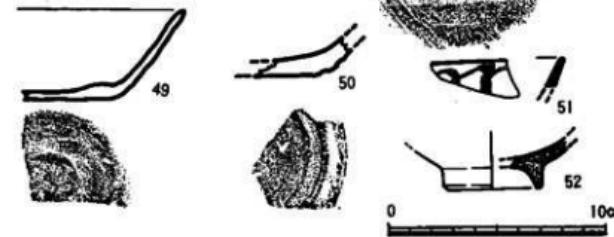
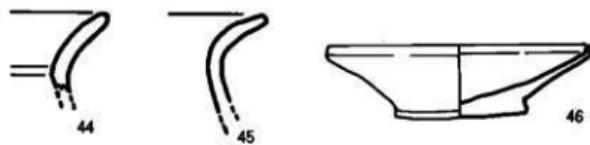
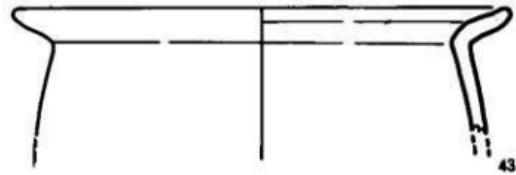
24は、口縁部が逆くの字形に内傾し、内傾部に2条の沈線文が施文されている。22は、口縁部が尖気味になり、内面は、ヘラ様調整具により平坦に調整され、口縁直下に2条の沈線文が施文されている。26は波状口縁である。25は、胴部に縦・横・斜走の深い沈線文が幾何学形に施文されている。

27・28は、肩部が逆くの字形に内傾し、その部分に凸帯をもつ變形土器である。27は、内面および外面胴部はヘラ様調整具により荒く調整している。凸帯には指頭による押圧文がある。夜臼式土器の範疇にはいると思われる。

29~35は、繩文土器の底部である。29は、内外面ともよくヘラ研磨されている平底で、焼成は良い。30はヘラ研磨されているあげ底であるが、一部剝離している。32・33は、裾のはる底部で下部が剝離している。円盤形貼り付けの底部であろう。31は、外面に貝殻条痕がある。34は、丸底様の底部かと推定され中央部は、円形に剝離している。35は、網代底である。

B. 石器（第5図-36~38）

38は砂岩製の有肩打製石斧で、刃部は欠損している。一部自然面を残している。36は砂岩製、5cm×4.5cm梢円形の石錐で抉りは磨切りである。両面はよく磨かれているが、磨切り部以外の周辺



第6図 出土遺物(3)

には自然面が残されている。37はチャート製の刀器である。その他、砂岩製の石皿なども出土している。

C. 布痕土器（第6図-39～42）

H-9・I-7区など他の土器と混在して出土している。

39は、口縁部がわずかに内傾気味となっている。胴部の最大厚さ1.1cmで、外面に凹凸がある。黄褐色を呈し、焼成は良い。42は、布痕以外に幅8mm板様の圧痕もみられ、赤褐色を呈する。40は、口縁が外方へ斜めにそぎ落されている。布目はいずれも類似しており、40は1cmあたり経糸9本、緯糸8本である。

D. 土師器・須恵器（第6図-43～50）

土師器は、H-7区周辺において多く出土して、變形、皿形があるが、少片が多い。須恵器は数点出土しているだけである。

43は、口縁部は屈折し、胴部のはる變形土器で、口縁部はヨコナデである。胎土に多量の小石を含んでいる。44・45は、口縁部がくの字形に外反している。46は、内面に稜がみられる。

47～50は、底径が8cm前後で、口縁部ほぼ45°前後で立ち上がる皿形土器である。底部はいずれも回転ヘラ切りである。胎土に雲母等を含んでいるがよく精選されている。焼成は良い。

46は、口径12.1cm、器高3.3cmの皿形の須恵器である。体部はやや外反ぎに開き、口縁部は逆くの字形に短く立ち上がる。体部内外面にロクロ痕が残り、右回りである。底部は、径6cm、高さ0.4cmの高台風の平底で、ヘラ切りで、底部周囲はヘラ切り成形している。

5. 結語

小原遺跡の今回の調査では、貝殻文土器、凸帯文土器、沈線文土器、黒色磨研の浅鉢形土器などの縄文晩期の土器、および石器の他、平安以降の土師器・須恵器などが出土している。縄文土器の特徴としては、貝殻文土器、黒色磨研の浅鉢形があげられ、この遺物は、遺跡南9kmの位置に所在する松添貝塚、延岡市野田八田遺跡出土遺物との関連性が指摘される。しかしながら、遺物が小片のため器形等も不明であり、詳細については不明である。

調査では、遺構は検出されなかったが、遺跡西方の区域など周辺においてこれらの遺物に伴なう遺構が存在すると推定される。

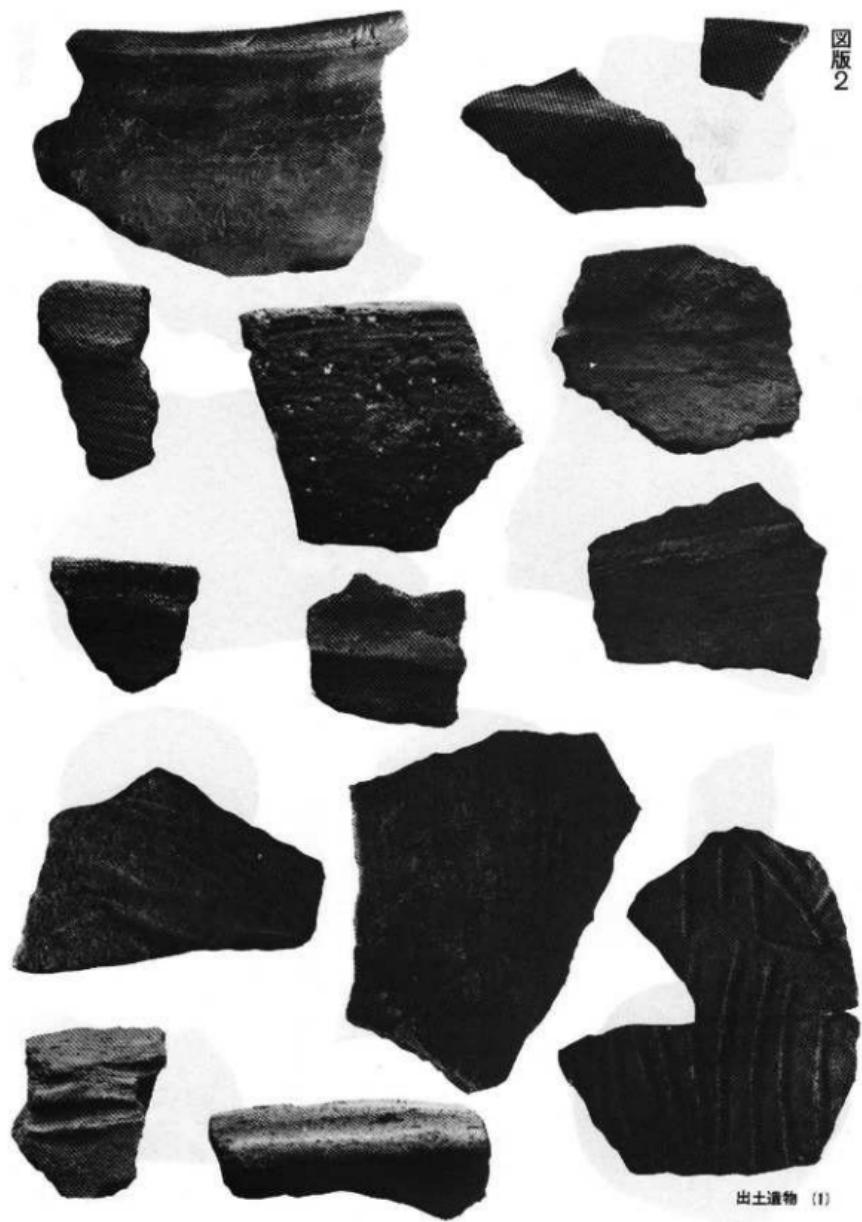
(面高哲郎)



遺跡遠景(北より)

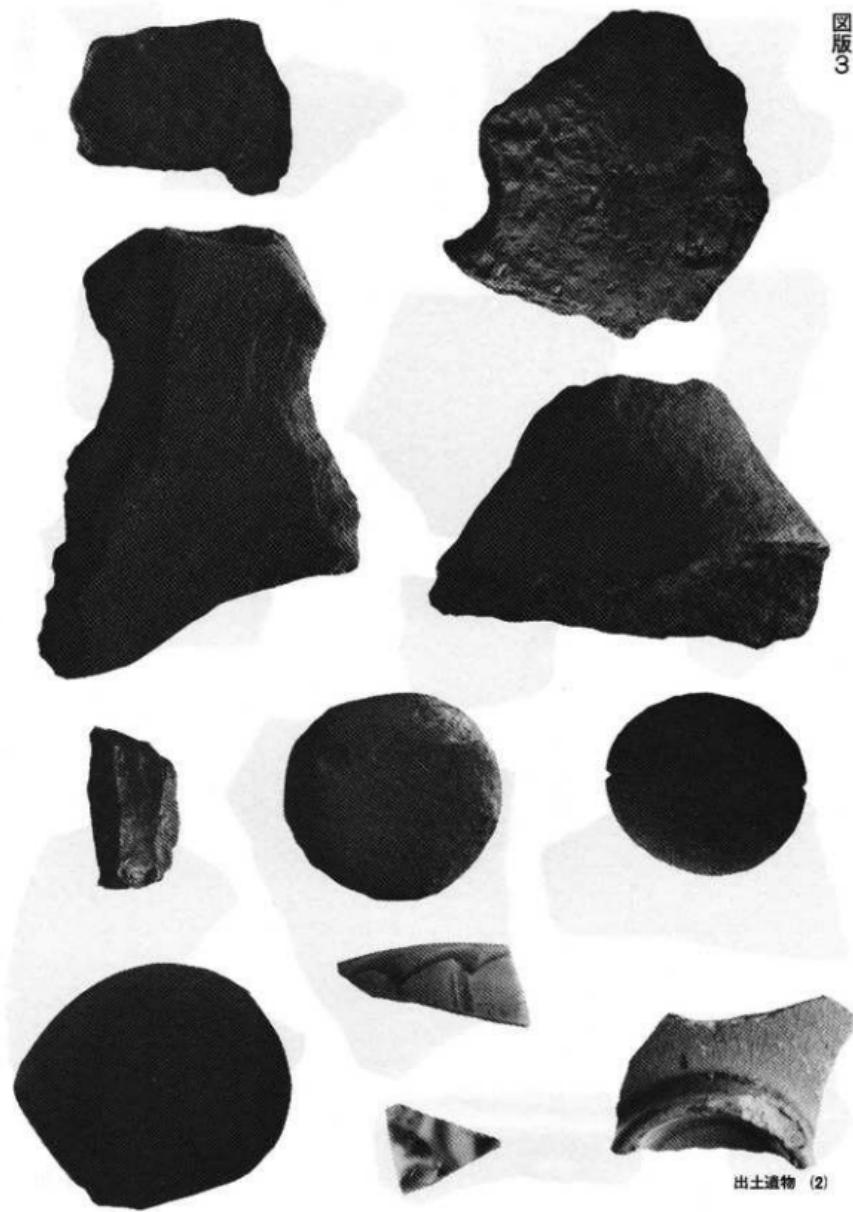


調査風景



出土遺物 (1)

出土遺物 (2)



城内遺跡(清武城跡)

宮崎郡清武町大字上加納字城内

本文目次

1. 清武城の沿革	201
2. 清武城の立地及び城域について	203
3. 調査経過	206
4. 調査の概要	206
5. 北平場西区	209
(1) 遺構	209
(2) 出土遺物	212
6. 北平場東区	214
出土遺物	214
7. 結語	218

挿図目次

第1図 清武城地形図	204
第2図 トレンチ配置図	205
第3図 北平場西区平面図(1)	207
第4図 A T - 4区東壁層位図	208
第5図 石垣実測図	210
第6図 北平場西区平面図(2)	211
第7図 北平場東区平面図	213
第8図 出土遺物(1)	216
第9図 出土遺物(2)	217

図版目次

図版 1 (1) 清武城跡遠景	220
(2) 調査地区平場	220
図版 2 (1) 本丸より見た南西平場	221
(2) 南西平場	221
図版 3 (1) 清武城跡西北端	222
(2) 伊東祐庵の墓	222
図版 4 (1) 北平場西区(南より)	223
(2) 北平場西区(北より)	223
図版 5 北平場西区V字状溝	224
図版 6 北平場西区石垣	225
図版 7 タタ	226
図版 8 北平場西区高台	227
図版 9 タ	228
図版10 (1) 北平場西区ピット群	229
(2) 北平場西区方形竪穴	229
図版11 (1) 北平場西区集石状況	230
(2) 北平場東区青磁出土状況	230
図版12 北平場西区出土遺物(1)	231
図版13 タ (2)	232
図版14 タ (3)	233
図版15 北平場東区出土遺物(1)	234
図版16 タ (2)	235
図版17 タ (3)	236
図版18 タ (4)	237

1. 清武城の沿革

清武城は宮崎郡清武町の北部、宮崎市との境に近い所にある丘地で、南麓を清武川が西から東に流れ、北麓には大淀川の支流が西から東に流れて要害の地をなしており、その西方を国鉄日豊本線と国道269号線が、ほぼ平行して南北に走っている。平部崎南の『日向地誌』には、

中野岡ヨリ西ニ連ナル岡阜ナリ高凡十五丈其嶺方平均凡四町地勢窟隆アリ幾区ニモ相分ル東ト西北ハ岡阜ニ接シ西ト南ハ高崖壁立ス本城ハ中山寺遺址ト南北相対峙シテ最高所ニアリ創築ノ年月詳ナラス

と書いてある。このように、この城の創築された年月は明らかでないが、この城は自然の丘地を利用して築かれた所謂中世式の山城であって、この地方に在る多くの城がそうであるように、南北朝時代(1331~1391)に築かれたものと考えられる。

この城は最初は清武氏の居城であったが、清武氏の素性は明らかでなく、清武地方に起った土豪で、後に清武城に挺て清武氏と称したものであろう。『日向記』によれば、日向国には鎌倉時代に源頼朝の寵臣工藤左衛門尉祐経(すけつね)の所領があったが、建久4年(1193)に工藤祐経が、河津次郎祐通の子曾我十郎祐成(すけなり)弟時致(ときむね)の兄弟に殺された後、祐経の遺領はその子祐時(すけとき)が県庄(あがたのしょう)富田庄、田島庄、木脇庄を受領した。

祐時は子が多くて県庄と富田庄を7男祐景、田島庄を4男祐明、木脇庄を8男祐頼に与えて分領させた。

その後祐時の子孫は伊豆の所領を失い、祐時より4代の孫祐持(すけもち)の時足利尊氏に仕えて戦功を立てて日向国都於郡(とのこうり)300町をもらって建武2年((1335)日向に下り、都於郡城を築いたが、祐持は京都の檢非違使(けびいし)に任せられ、貞和4年(1348)に上京したところが途中で病を得て京都で死んだ。この間に都於郡城は木脇祐明の子孫の伊東藤内左衛門尉祐広(南朝に属した)の子守水下野守祐氏が横領した。

祐持の子祐重は母と共に京都に居たが、祐持の旧臣垂水弁阿舍利(たるみずべんあじやり)という六十六部の幹族で都於郡の旧臣との連絡が取れ、貞和4年12月一族や家臣を連れて日向に下った。しかし都於郡城には守永祐氏が居て動かないので、四天王の一人荒武太郎左衛門の扱いで守永の娘を祐重の妻として、祐重を都於郡城の内城に入れ、守永は池尻の城に移らせた。こうして祐重は無事都於郡城に入り城を修築して足利尊氏のために戦って戦功を立て、尊氏の1字を賜わって祐祐と称し、次第に勢力を張り、その娘を清武越後守の妻とした。だからこの時には清武氏は清武城に挺り、清武地方を領してこの地方の一角に蟠踞していたことが知られる。

さらに同書の記す所によれば、応永4年(1397)薩摩の城主島津陸奥守氏久は兵を日向に進めて清武城を攻めたが、その功なく敗退して薩摩に帰り、翌年和睦が成り2月志布志に伊東祐安(祐重の子)が行って犬追物を行ったとある。だからこの戦に伊東氏が清武氏に味方したことが知られる。都於郡の伊東氏は祐安から祐立、祐堯(すけたか)が立ったが、祐堯は一族家臣の所領を併せて都於郡城を中心に日向の中央に勢力を増大した。この時清武城は文安5年(1448)4月、清武祐行の跡の越後守祐恩(すけよし)が死んで子がなく、弟の式部少輔祐憲(すけのり)に譲ったが、祐憲は乞い請けて、その領地

木原、加納、船曳、田野、今泉の地を知行したとある。これから清武氏は伊東氏の家臣となったことは、三位入道義祐時代の家臣名を記した「諸侍衆懇願一人撰事」の中に清武權太左衛門尉の名があるのを見ても知ることができる。

さて祐堯は文明17年（1485）に子の祐国と祐邑が鰐肥城（島津氏）の再征に出陣するのを送って清武城に後話をしたが、同年4月28日中野で死亡した。年77歳、それで墓と祐堯を付祭する加納神社がある。

なおその後の清武城主は永禄11年（1568）に義祐が鰐肥城を取っていわゆる48城の城主揃の時は、長倉伴九郎と上別府宮内少輔の二人が清武城主であったが、この二人は元亀3年（1572）5月4日の木崎原の合戦で戦死した。その後天正5年（1577）に伊東義祐が豊後に落ちた時、随って行った家臣の中に「清武衆 上別府新十郎」の名が見える。また伊東氏に代って日向国全域を領有した島津氏時代の城主としては天正8年の文書に「清武城主伊集院美作守久宣」の名が見える。また天正16年（1588）には河崎駿河守が城主で、これから慶長3年（1598）まで在城し、朝鮮征伐にも従軍したが、同年稻津掃部助（いなづかもんのすけ）が讒言してこれに代り、慶長5年の関ヶ原戦の最中に掃部助は宮崎城を攻め取り、佐土原城や島津氏の諸城を攻めたが、慶長7年掃部助は罪を得て立て籠り討たれて死んだ。そして河崎駿河守がまた城主となつたが、元和元年（1615）の一国一城令で廃城となつた。

しかし鰐肥藩では中野に清武地頭を置いてこの地方を治めた。以上が清武城の沿革であるが、今回調査した個所は城の外郭であるからその外郭について『日向地誌』の記事を引用して説明しよう。（一部文字を変更した）

古城跡

清武城跡ト中野岡トノ中間ニアル一岡ナリ高清武城跡ト齊シ其嶺方平均一町許遠クシテ之ヲ望メバ
截然トシテ城形ヲナス、何人ノ居域ナリシヤ伝ハラス蓋シ清武城ノ未ダ創築セザル以前ノ城と見ユ、
今猶古城ト呼デ地名トナル。

古城跡

中野岡ノ北ニ続キシ一岡ナリ其三面ハ昔迫谷ヲ帶ビ唯西ノ一隅尾続ナリ何レノ世ノ頃ナルヤ此地ニ
兵ヲ屯ロセシコトアリシト見ユ今地名トナル。

文永寺跡

禪宗、鰐肥報恩寺ノ主派ナリ中野岡ノ東南隅木原村界字檜内ニアリ文永中創建セル所ナリト見ユ明
治五年壬申廢ス今八分ハ宅地トナリ二分ハ墓地トナル。

蓮德寺跡

法華宗、中野岡ノ中央字楠馬場ノ東畔ニアリ明治五年壬申廢ス今八分ハ宅地トナリ二分ハ墓地トナ
ル。

玄松院跡

宗派審ナラズ中野岡ノ西北古城ノ北畔ニアリ焼毀ノ年月考フ可ラズ天保ノ頃マテハ虚空藏堂猶存セ
シカ今全ク焼シテ畦圍トナル其側古墳多ク存ス。（古墳とは古い墓の意）

中山寺跡

真言宗鰐肥成就寺ノ末派ナリ清武城跡北一町許一ト迫ラ隔テ本城ト相対峙セシ一岡上ニアリ要害ノ
地ナレバ一寺ヲ建テ本城ノ支城ノ如クセシモノト見ユ、明治五年壬申廢ス今宅地トナル。

登能尾山跡

中山寺ノ西北ニ当リ一塙ヲ隔テ清武城ノ支城ナリシト想ハル此モ古ハ蓋シ跡ナリ、文化中中野ノ土族等此ニ射場ヲ築シテ地形ヲナラセシニ許多ノ骸骨ヲ發キ出セリト故老ノ話ヲ聞ケリ。

觀音寺跡

登能山ト一追ヲ隔テ西北ニ連ナル一岡ナリ古觀音寺ト云寺ノアリシト見エ今地名トナル。

以上の記事を見れば、清武城の付近にある丘地は殆んどこれを支城として、寺院を建てているが、一朝有事の際はこれを防禦の施設として利用したものであることが知られる。なお注意すべき事は、この「日向地誌」の著者平部崎南は清武村の和田重寛の子で、出でて平部家を嗣いだ人であるから、清武はその故郷であることで、ここに記載されている記事が詳細を極めていると共に、信頼性の強いものであるという点である。従って今回の発掘地が、これらの所謂支城性をもつ寺院の跡と同じ性格であることが知られるのである。

(石川恒太郎)

2. 清武城の立地および城域について（第1図・図版1～3）

清武町北部には、南端に最高位をもち、北へ樹枝状に延びる低丘陵が発達している。この丘陵南には清武川が東流し、丘陵南辺は浸蝕崖となっていて、また、丘陵間はわりに深い谷が形成されている。清武城はこの丘陵南端に立地している。行政上は、宮崎郡清武町大字上加納字域内に属する。

本城は、丘陵上でも、最高位に属し、本丸は標高約85mにある。この地よりは、北は宮崎市、南は清武町、田野町までを一望できる。城域は、南北380m、東西320mの範囲にあり、西と南側は浸蝕崖となり、北と東側は深い谷を形成する自然の要害の地である。城域南端の平場と、下の沖積面との比高差は約23mある。本丸は、城域北端にあり、その本丸より南西および南へ平場が開けている。

本丸より南西に展開する平場は、2mほどの段差をもって展開し、本丸より離れるに従い平場は広くなる傾向がある。特に南西端の平場は、緩やかな傾斜地であるが、150m×100mと大平場である。これらの平場からは、染付、青磁、陶器、瓦等が採集される。本丸南西下には湧水もあり、幅2～3mの細長い小湿地が本丸下にある。

本丸より南西に展開する平場の南東には、小谷をはさんで南へ展開する平場がある。この平場は、通称「二の丸」と呼称されており、字名も域内となっている。この平場を今回調査した。

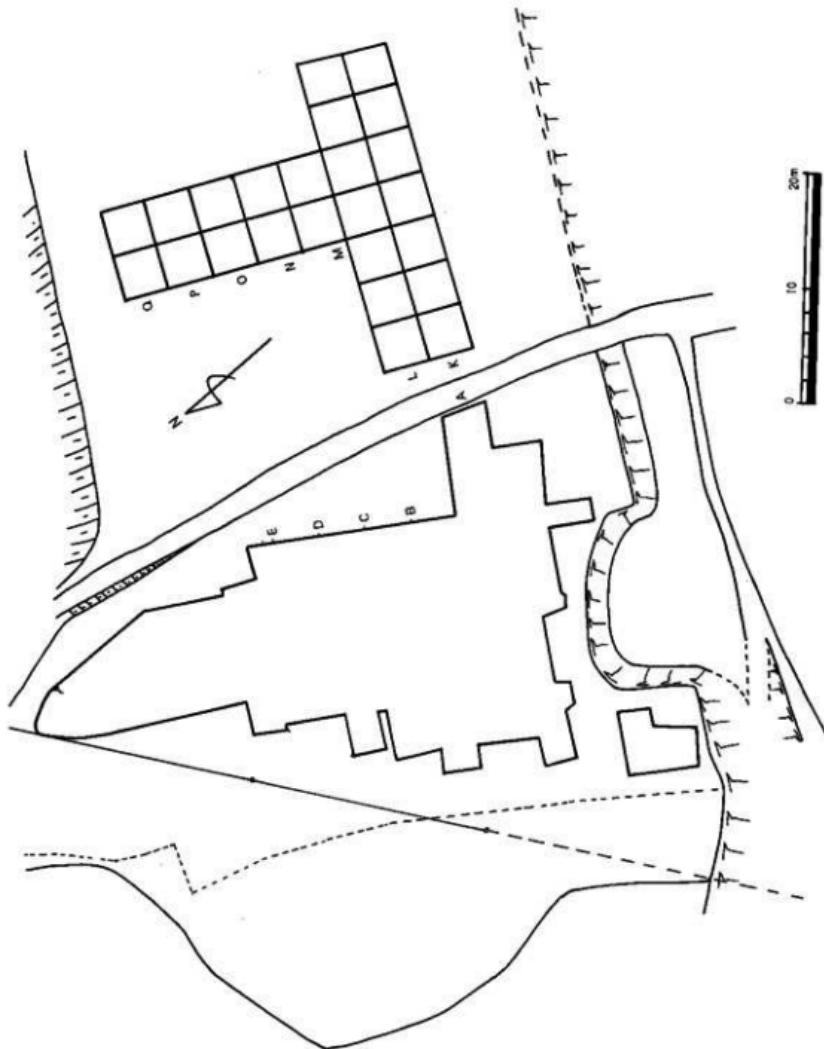
平場は、現在分断された状態となっていて、分断面との比高差は3m程あり、壁にシラス層が露出している。この分断は、城構築時のものかは不明であったが、本丸より南へ延び丘陵を掘り切りにより分断し、連郭式拠張であったと見取ることもできる。この平場は、また、中央部を掘り切りによって2区分されている。

以上の2平場群の間を、近世の道路が通っていて、この道路は、佐土原方面に通じていたとのことである。この清武城に關係する居館は、附近の地勢より城西に開ける河岸段丘上にあったと推定され、先の道路が、城へ通じる道であった可能性がある。

なお、城周辺には、文明17年（1485）清武城にて病死した伊東祐堯や、城主であった稻津掃部助の墓がある。



第1図 清武城地形図



第2図 トレンチ配置図

3. 調査の経過（第2図）

発掘調査は、昭和51年10月12日より同年12月22日まで、延べ42日間行ない、対象地は、自動車道の通過する清武町の一帯、通称二の丸と呼称されている南平場である。

対象地は、分布調査の際、土師器片が採集されていたことから古代遺跡の存在を考え、調査を開始したが、調査初期において、青磁、溝状遺構、柱穴群などが検出されたり、北200mに清武城本丸が位置することから、対象地は、清武城の一帯であろうと判断し、調査観点を変更し調査を行なった。

10月13日、幅10mで堀り切られている南平場においてセンター杭近くに2m×4mの調査区を設定し調査を行なう。耕土下はすぐシラス層となっていて、遺物も出土せず、50cmほど掘り下げたのちこの平場の調査を打ち切る。同日、北平場西区にAからEトレンチを設定し、南端のAトレンチより調査を進める。14日、A-3区においてV字状溝を検出する。その後、この溝はA-4・5・7区に延びており、遺物には、土師質土器、青磁等が出土していることから、また、近くに清武城本丸が存在することから、調査地は、清武城の一帯であろうと判断する。

以後、11月3日まで、北平場西区の調査を主に行ない、遺構の検出に努める。V字状溝は全長20mあり、その周囲には、大小のピットが多数検出される。溝西端において、南北に延びる掘り込み、石垣、B-12区周辺にピット群、C-8区周辺に集石遺構、方形竪穴、E T北部に、比高差50cm程の高台などが検出される。その間、V字状溝の東への連なりを確認するため東区にKトレンチを設定し調査するが溝は延びていない。

11月1日、北平場東区にKトレンチに続き、北へ、L・M……Qトレンチを設定し調査を行なう。11月4日より11月13日まで、主に東区の調査を行なう。調査期間の関係で、部分のみしか調査を行ないえなかったが、L～Qトレンチにおいて多数の柱穴を検出する。

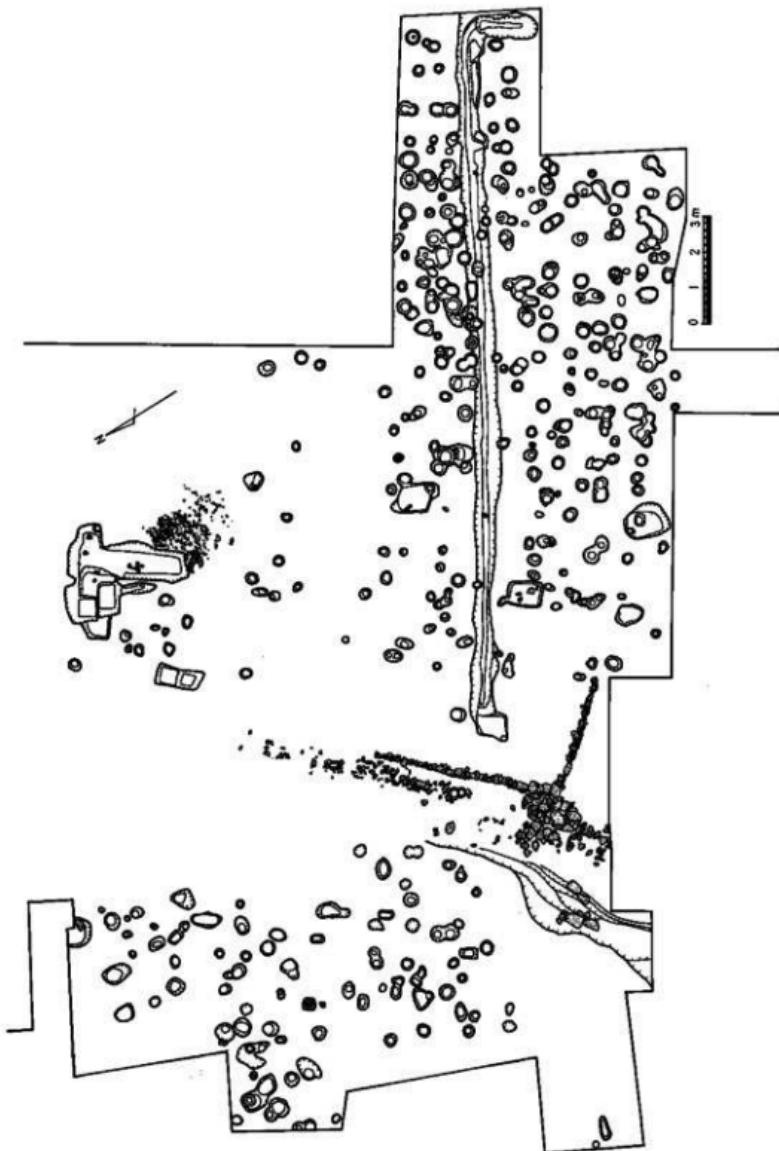
11月15日より同月20日および16日より同月22日、遺跡の実測を行ない調査を終了する。

4. 調査の概要

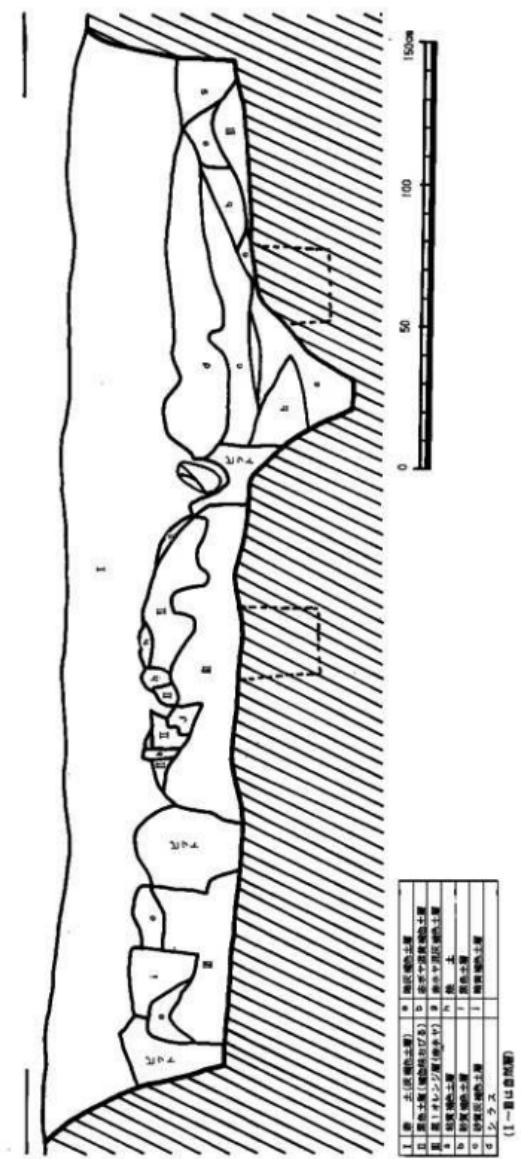
南平場の調査は、2×4mの調査区を1ヶ所設定し行なうが、耕土下はシラス層となっていて、遺物は出土していない。附近の丘陵上は、シラス層の上位には、普通第1オレンジ層、黒色土層がのっているが、南平場においては見られない。このことは、平場は、丘陵を削平し、形成され、その際上層はカトされたものと考えられる。

北平場西区の調査は、南より幅4mごとにA～Eトレンチを設定し、東より2mごとにA-1区、A-2区と呼称することにした。検出された遺構は、V字状溝、石垣、通路と考えられる掘り込み、集石遺構、1m90cm前後の方形土坑、北部には、比高差50cmの高台、その東に幅2mから3mの通路と考えられる掘り込みの他、3つの柱穴が検出された。

北平場は、南へ緩やかに傾斜している。表土下は、南より北へ行くに従い、黒色土、第1オレンジ、漆黒土層、褐色土、北端附近ではシラス層が露出してくる。その露出関係は、上層から下層への附近的層位関係である。従って、西区においては、北端が最高位であった丘陵を削平して、平場を形成したと推定される。



第3図 北平場西区平面図(1)



第4図 AT-4区東壁層住図

平場西区の出土遺物は、青磁、白磁、染付などの輸入陶磁の他、土師質皿、土錐、陶器、硯、石製品刀、洪武通宝などの古錢、近世陶磁器、釘と思われる鉄製品が出土している。

北平場東区の調査は、南より幅4m、KよりQトレンチを設定し、西よりK-1区、K-2区と呼称することにする。東区は、みかん園となっていたが、層は意外に残っていた。基本層序は、表土、灰褐色土層、黒色土層、第1オレンジ層、漆黒土層、褐色土層となっている。調査は、平場の一部のみしか行ないえなかつたが、各調査区より多数のビット、遺物が検出された。古老の話によると、この平場北部には、明治期まで家屋があったということであった。出土遺物にも明治期までかかる陶磁器類がある。検出されたビットにも各時期のものが混在していると考えられるが、ビットの関係については把握しえなかつた。

東区の平場は、丘陵上の自然層が残されていたことにより、当時よりわりに平坦な地形であったと推定される。

出土遺物は、東区の出土遺物と同様のものが出土した以外に、縄文土器、弥生土器、土師器、縄文期の石錐、有肩打製石斧なども出土している。これらの遺物は、いずれも第3層黒色土層より出土しているが、各期の包含層を層としては区分しえなかつた。

5. 北平場西区（図版4）

(1) 遺構

V字状溝（第3・4図、図版5）

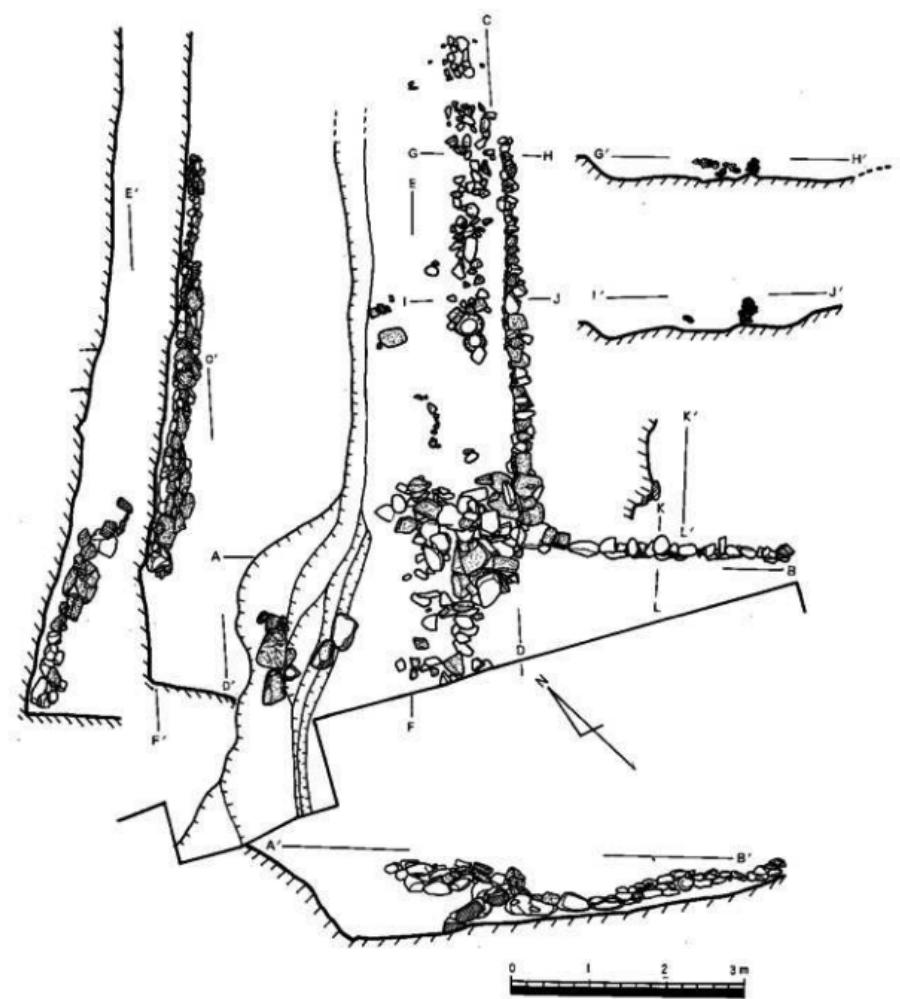
V字状溝は、平場南辺に沿って、東南東から西北西方向にはば直線に延び、全長20cmある。両端は、南へ折れているが、以後南へは延びていない。溝は褐色土層直上において確認され、幅平均60cm、底幅10cmを測るが、当時は、幅170cm、深さ65cmの溝であったと思われる。この溝は、ある時期に廃棄されシラス等によって埋められている。

溝の周辺には、径50cmから20cm、褐色土層直上よりの深さ50cmから20cmと大小様々なビットが100個以上検出された。このビットには、溝に伴うもの、溝廃棄後のものなどがあるが、ビット間の関係については把握しえなかつた。

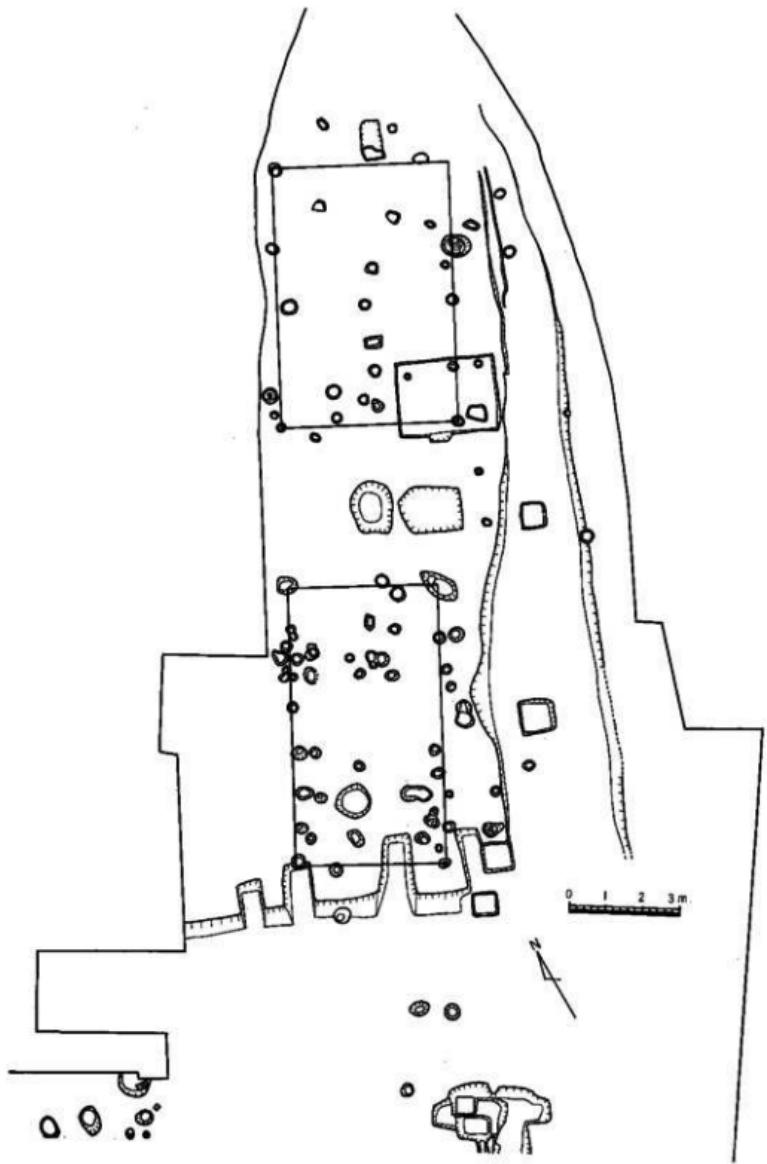
石垣と堀り込み（第3・5図、図版6・7版）

V字状溝の西において、南へ傾斜し、西南へ延びる通路と推定される堀り込みが検出された。堀り込みは、幅150cmから200cm程あり、勾配は15度から20度で急傾斜している。この堀り込みの延長部については、確認していないが、中央堀り切りに連なり、西方の登ってくる小道と接続していたとも推定されるが断定しえない。

堀り込みの東辺においては、附近において産する溶結凝灰岩（通称灰石）や河原石を石材とする石垣が築かれていた。石垣は、L字状の交点の最深部は、40cm×30cm程の大石を用い、上位へ行く従い、人頭大から拳大を用いて積み上げている。河原石には加工痕はみられないが、灰石は加工しやすいためかある程度の成形が認められる。石垣の配列は、L字状、およびその交点より西・南へのラインが認められ、数回構築されなおされているが、その詳細な変遷については確認しえなか



第5図 石垣実測図 (◎は溶結凝灰岩)



第6図 北平場西区平面図(2)

った。その中で、最終段階の石垣は西方へ延びるものであり、北堀り込みはこの時期に埋められている。堀り込み中に北へ50cm幅をもって延びる集石群は、北への石垣ライン焼棄のものである。

この遺構周辺の出土遺物は、土師質皿、青磁、丸瓦等があり、図版12-12は、西方へ延びる石垣東、丸瓦は、集石群内において出土している。

高台および掘り込み（第6図、図版8・9）

北平場西区には、削り出しによる高さ50cm程の高台があり、その北端附近ではシラス層が露出していた。高台東には、南端において最大幅300cmを測り、先細りとなり傾斜角5度前後の掘り込みがある。この遺構の床面には、薄い砂層があり、高台に伴なう通路と思われる。また、掘り込み中央部二ヶ所において、1辺90cm、50cmの方形土坑があり、深さはそれぞれ160cmと90cm程であったが、遺物は出土していない。この遺構は、後世のイモなどの長方形貯蔵穴により部分的にカットされている。

高台上には、基礎石などのはいるピット群が2グループ検出された。南のピット群は、東西4間(4.1m)南北6間(7.5m)北は、東西1間(4.78m)南北4間(6.8m)の掘立柱の建物があったと思われる。

遺物は、基底の染付、青磁(図版12-2)、綠釉陶器などが出土している。

集石遺構および周辺堅穴群（図版10、11）

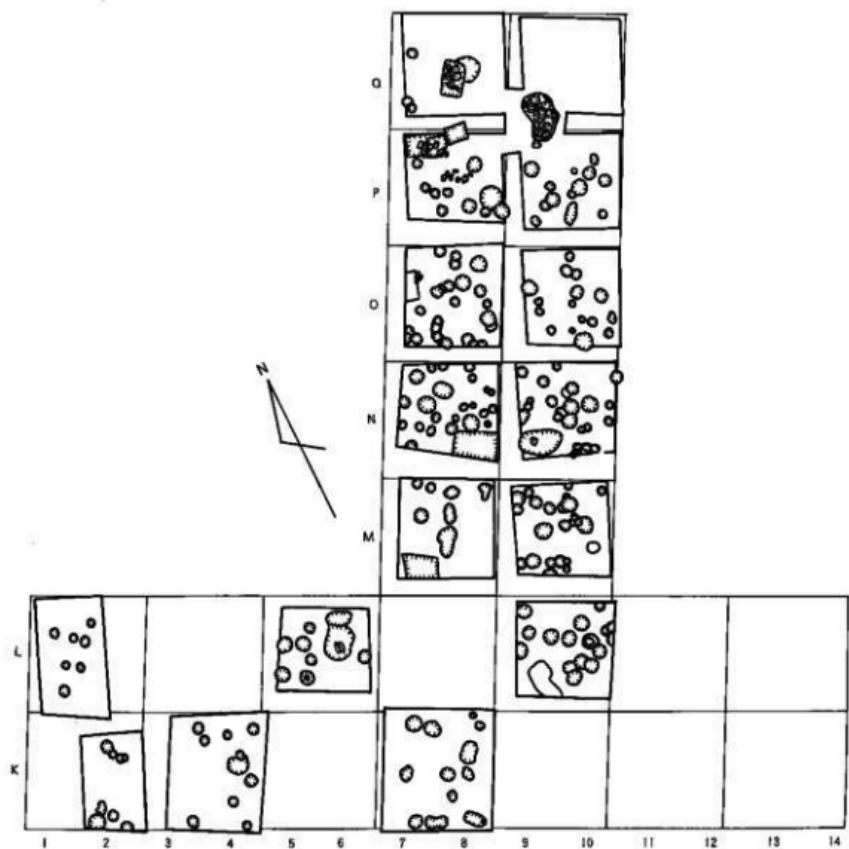
調査区中央部には、挙大の焼けた角礫が200cm×200cmの範囲に平面的に集石し、その周辺より炭化材が出土している。また、集石部北西には、1辺50cm程の方形土坑3個と80cm×320cmの長方形土坑が切り合っている。方形土坑3個のうち1個は190cmと深いが、他は50cmほどで浅い。190cmの深い土坑はシラス層まで掘られている。この方形土坑からは遺物は出土していないが、長方形土坑からは、備前IV期のすり鉢が出土している。（第9図-7）

(2) 出土遺物

北平場西区より出土した遺物は、青磁、白磁、染付などの輸入陶器、土師質皿、土錐、すり鉢、硯、石製品、刀、近世陶器、古錢、釘などの鉄製品等が出土しているが、破片のみで量的にも少ない。その中で青磁についてはわりに多く出土している。以下主な出土遺物について記述する。

青磁（図版12-1～19）

蓮弁文は、鏡はないが蓮弁が削り出してある（図版12-1・2）口縁下に一条の波線下に継位の刻線のあるもの（図版12-3・4）がある。後者には貫入が見られるが前者はない。図版12-7は、底部で釉は暗緑色で厚く、高台内は露胎で、赤いしづがみられる。見込には印花がある。図版12-5・6は、内湾する口縁で、内面に継位2単位の刻線がある。図版12-8は、口縁端が肥厚し釉は朽葉色を呈し、貫入がみられる。図版12-10は、釉は青白色で貫入は見られない。高台内、豊付部は露胎である。図版12-11は波状口縁をもつ青磁皿で、釉は暗緑色である。内面に3単位の波状刻線がある。図版12-12も皿形の青磁で腰にヘラ削りの稜線が明瞭に残っている。釉はにぶい暗緑色で、見込、高台内は露胎である。重ね焼きのためか、豊付部の釉色は、灰緑色であり、見込、高台内は完全に磁器化していない。



第7図 北平場東区平面図

その他青磁には、端反り皿形も出土している。

白磁（図版12-20）

白磁には、やや青みをおびる白磁と、完全に磁器化せず、また釉が乳白色を呈するものがある。前者には、端反りの皿形があり、釉に気泡がみられる。（図版12-20）後者には、腰が角ばって、口縁が斜め上方に立ち上がるもの（図版12-16・17）や、浅い皿形で高台もあり高くなく、釉は体部下半におよばない（図版12-18・19）などがある。

染付（図版13-1-4）

数点出土したのみである。図版13-1は見込に花文、高台内に文字がみられる。他に基筒底のもも出土している。

土師質皿（図版13-9・10）

皿のみで出土し、いずれも破片である。底部は糸切りで、東区出土の土師質皿と同種である。

石製品（図版14-1・2・4）

石製品は、硯、板様石製品等が出土し、硯は粘板岩製である。板様石製品の角はいずれも直角に切斷され、厚さも薄い。

陶器（第9図-6・7、図版13-11~16）

備前Ⅳ期のすり鉢、施釉陶器として瀬戸などが出土している。また備前風口縁をもつ大型の壺形土器、常滑の口縁なども出土している。

6. 北平場東区（第7図）

東区においては、多数のピットなどが検出されたが、その詳細については不明である。出土遺物は、縄文期より明治期のものまで出土し、その出土量も多い。ここでは、その出土遺物の主なものについて記述する。

出土遺物

中世以前の遺物（第8・9図、図版12）

縄文土器は、いずれも晩期に比定される土器であり、沈線文土器、貝殻文土器である。沈線文土器は、文様帶は、口唇部と胴部にある。第8図-1は波状口線をなし、口唇部にヘラによる短かい斜沈線が施文されている。第8図-2は、口唇部に2条の沈線がめぐっていると考えられる。第8図-3は、球形の胴部で、上位に斜沈線が施文されている。第8図-5は貝殻文土器で、一条の凸帯がみられる。これらの縄文土器は、宮崎市松添貝塚出土の遺物に類似している。

弥生土器は、壺形土器が数個体出土している。第9図-1は、L字状の口縁をもち、口唇部に一条の沈線文があり、肩部に2条の三角の突帯がめぐっている。第9図-8は、口縁直下に一条の凸帯がめぐり、口唇外端および凸帯に刻目が施されている。いわゆる下城系土器である。

第9図-5は、器高8.8cm、口径18cmの内黒土器である。ロクロ成形であり、高台は貼り付けである。内黒ではないが、高台が類似しているものが2点出土している。第9図-4は、口径24.6cmの壺形の土器で、器面は粗い刷毛調整であり、口縁にはヨコナデもみられる。

その他、布痕土器も数点出土している。(図版18-7・8)

中世以後の遺物(第8・9)

中世以後の出土遺物、西区同様、青磁、白磁、染付など輸入陶磁器、土師質皿、土錠の他、陶器および近世陶磁器などが出土している。これらの遺物の出土量は多く、特に染付が多く出土している。近世陶磁器は、QT-7区の方形堅穴に一括投げ込まれた状態のものもあり、この遺物は、古老の話にある家屋の廃棄時のものと推定される。

青磁

西区出土青磁と大差ないが、蓮弁を縦位の線刻だけで表わすもの(図版16-3)や口縁外面に雷文を表わすもの(図版16-7)も出土している。

白磁

白磁についても西区同様で、半透明の乳白色の白磁、やや青みをおびる白磁などがある。図版16-9は、腰が角ばって立ち上がり、また体部は八角形をなすと考えられる。高台内は露胎である。釉は半透明の乳白色。図版16-8は、青みをおびる白磁で器高3cm、口径12cmを測る。口縁は端反りで疊付のみ露台となっていて、砂高台である。また体部と高台境に釉の切れ目がみられる。

染付

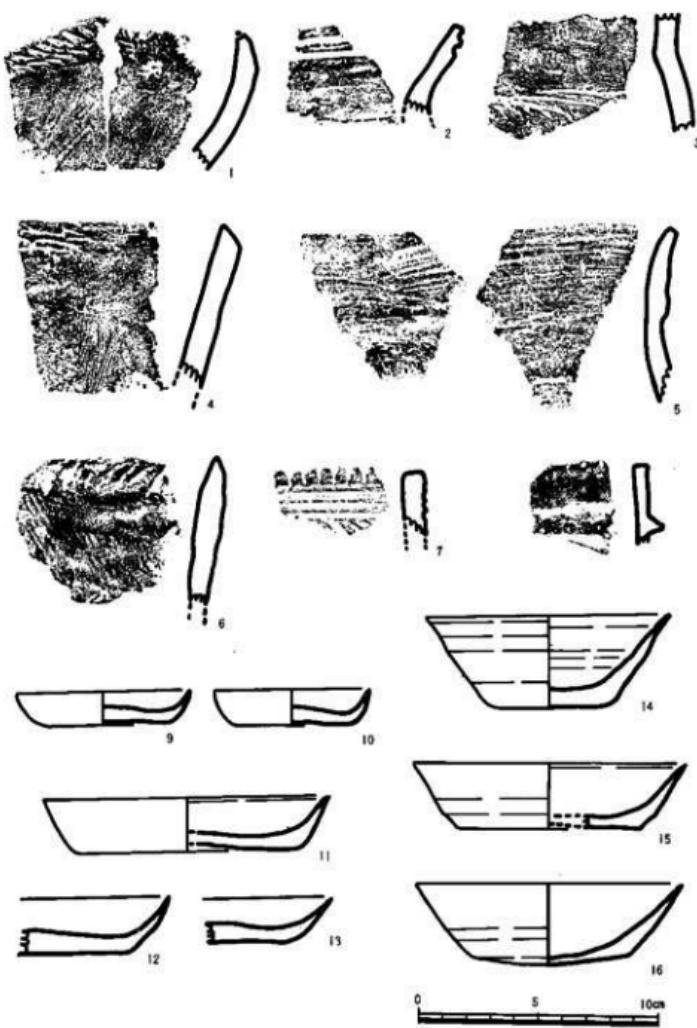
染付は、皿形、碗形など出土している。図版16-13は、器高2.6cm、口径11.8cmの端反りの皿形である。胴部外面には牡丹唐草文があり、見込には、玉取獅子様の文様がみられる。疊付のみ露胎で、高台内に釉の切れ目がある。内外面とも釉に気泡が見られ、見込には砂が付着している。この種の皿形磁器は、5~6個出土し、見込に十字花文のあるものもある。図版17-2・3は、口縁が内湾し、基筒底の皿形である。胴部外面に芭蕉葉文、見込に牡丹文がみられる。疊付は露胎となり、高台内に釉の切れ目もみられる。3個体出土している。基筒底を有し、見込に花文のあるものもある。図版17-5は、やや大きめの基筒底であるが、二次加熱により、くすんだ青灰色に変色している。

その他、染付は、胴部外面に唐草文のある碗形(図版17-6)、見込にテーブル様のものが描かれ、高台内に□□福□の文字のみられるもの(図版17-7)、口縁内外面に2条の界線をもち、外面に幾何学文様のある(図版17-8)なども出土している。8は他と幾分趣きを異にしている。

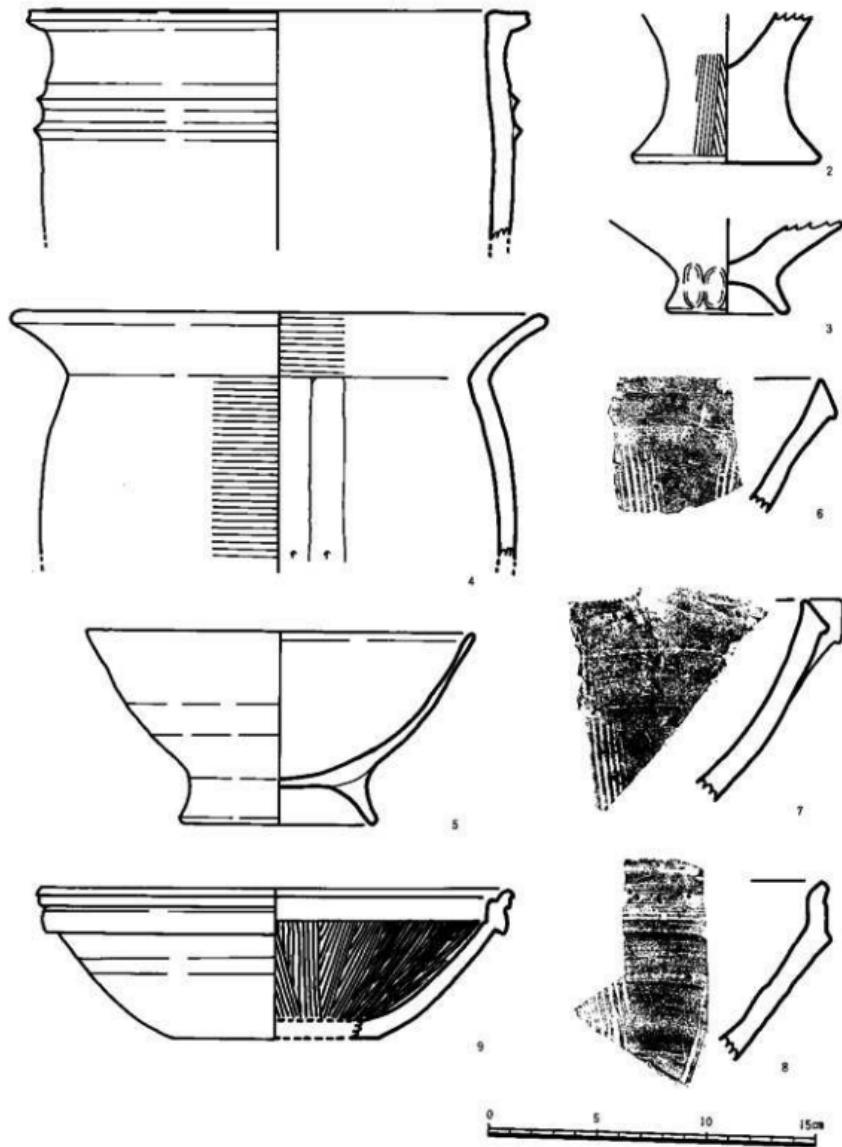
土師質土器(図版18-1~6、第8図-9~16)

土師質土器は、皿形が多く出土している。この皿形土器は、器形より4分類される。I類は、口径が7cm前後、器高2cm以内で口縁部は、外面において内湾ぎみに立ち上がる。(第8図-9・10) II類は、口径12cm前後、器高2cm~2.5cmで、器形はI類に類似する。(第8図11~13) III類は、底径が小さいわりには、器高が4cm前後と高くなり、外面に成形時の棱線が残る。(第8図-14) IV類は、器高が3cm前後とわりに高く、底部より角をもって立ち上がり、III類と同じく成形時の棱線を残している。(第8図-15・16) このI類とII類が多く出土しており、西区において出土した土師質皿は、I類・IIである。I類の皿の中で、図版18-1(第8図-9)は、口縁部二ヶ所に灯心痕が見られることより、灯明皿として使用されたものであろう。

陶器(図版18-9・10、第9図-8・9)



第8図 出土遺物(1)



第9図 出土遺物(2)

陶器には、すり鉢、斐形などが出土している。すり鉢には、備前焼のものがあり、Ⅳ期以降のものが出土している。斐形土器には、備前風口縁をもつ大型のものも出土している。その他、施釉陶器も出土しており、瀬戸のものなども含まれている。

7. 結語

(1) 今回の調査で、北平場西区においては、石垣、V字状溝など遺構が検出され、東区においては、遺物の出土量が多かった。検出された遺構は、V字状溝は、発見されたのち、新たにその周辺に建物が建てられており、石垣については、数回その形状が変更されている。同様のことは、他の遺構についても言えるが、その時期、また、遺構間の関係については把握できていない。

遺物では、青磁、白磁、染付など輸入陶磁が多く出土している。この中で、染付については、16世紀前半のものが中心であり、青磁、白磁についても同様の時期である。遺構の多数検出された西区においては、青磁を中心とした輸入陶磁や中世陶器が出土しているが、染付が16世紀前半ということは、清武城の存続期間に含まれる。

東区を中心に多く出土した土師質皿は、4分類されたが、Ⅲ類、Ⅳ類は、壺、碗と見ることもできる。Ⅰ・Ⅱ類は、西区・東区において多く出土したことや、器形、技法に共通性が見られることから、Ⅰ・Ⅱ類に共伴するとみてよさそうである。Ⅲ類・Ⅳ類は、出土量が少なく、西区に出土しないことから、Ⅰ・Ⅱ類と時期差があり、時期があがると思われる。あるいは、内黒土師器に共伴するかとも考えるが、これらは今後の課題したい。

(面 高 哲 郎)

注1. 九州歴史資料館、龜井明徳氏教示による。

(2) 輸入陶磁器の発掘について

今回の発掘で染め付けや青磁、白磁などの輸入陶磁器片が、かなり多数発掘されたことは日向国の中世の研究史上に重大な資料を提供するものとして注目すべき事実であるが、この遺跡すなわち清武城跡のある地方は、古くは国富庄（くどみのしょう）の地で、建久8年（1197）の『日向国図田帳』には「八條女院御領國富庄代千五百二町」とあり、また『日向記』には「其比（そのころ）院ノ御庄二十一ヶ郷ト云ハ赤井川（大淀川）ヨリ南ニ十一ヶ郷、河ヨリ北ニ十ヶ郷也云々」とあって、この地方は河南十一ヶ郷の中に属していた。八條女院というのは、鳥羽上皇の皇女聰子（あきこ）内親王のことであるが、八條女院が歿せられた（建暦元年1211）後は皇室の御領となり、後に皇室に持明院統（後の北朝）と大覺寺統（後の南朝）との二つの統派を生じたが、この庄園は後宇多天皇の系統である大覺寺系の天皇の所領となり、最後に後醍醐天皇の所領となつたが、天皇は足利尊氏の元弘三年（1333）の勅命としてこの庄園を尊氏に与えられた。

それで尊氏は河南11ヶ郷を治めるため加納（清武町）に加納政所（かのまんどころ）を置き細川小四郎義門をして治めさせ、河北10ヶ郷には富田郷政所を置き日下部氏の一族平島氏に活めさせた。その後尊氏は暦応2年（1339）に後醍醐天皇が崩御されると、敵ながら天皇の御冥福を祈るために翌三年に大覺寺を建てることにして、国富庄を大覺寺に寄付した。これが後の天龍寺であるが、京都

の嵯峨に36町9畝という宏大な寺であったから七堂伽藍を建てるには莫大な資金を要したので、その資金を得るために始めたのが、僧珠石（夢窓国師）の献策を用いた天龍寺による中国元（げん）との貿易であった。こうして元寇以来断続していた中国との対外貿易が復興したが、尊氏が國富庄を天龍寺建立のために寄進したのも、ここに赤江港があったからであろうと思われる。

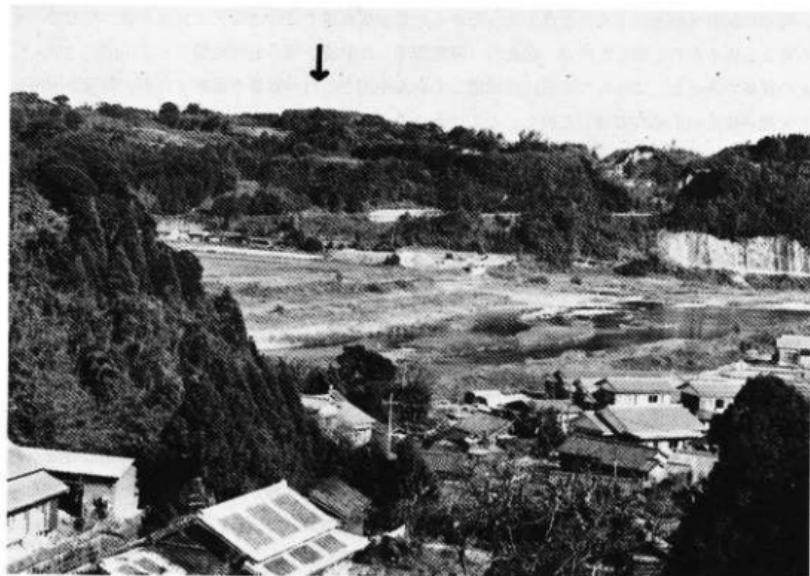
中国においては早くから陶磁器が造られ、宋の時代は中国の陶磁器の技術が最高となり青磁、白磁が盛んに造られたが、元の時となって染め付けの技術が発達した。さらに明の時代には政府の窯が築かれて染め付けや五彩が発達し、末期には呉須赤絵が輸出用に盛んに造られた。

このような中国の陶磁器の歴史と併せ考えれば、天龍寺船によって開かれた元や、これに続いた明との貿易によって中国の陶磁器がわが国にも賣られたことは当然で、日向国に於いても、例えば『日向記』の天文12年（1543）の記事に、

「同癸卯年（天文12）日向ノ津々ニ唐船十七艘入来故異國ノ珍物数不知浦々大ニニギハヒケリ」

とある。このように、中国との貿易は、その後元より明に至るまで続き、日向の津々浦々には異国の珍物が數多くもたらされたのである。従って今回発掘された外国より輸入の陶磁器の破片は、このようにしてもららされたものであることが知られる。今回の発掘でも清武城の城域に寺院があったことが明らかにされたが、寺院の僧や城主らが赤江港（城ヶ崎）にもたらされた中国などからの輸入品を手に入れて用いていたことが、ここに立証されたわけで、その意味で今回の発掘調査は非常な成果を挙げ得たということができるであろうと思う。

（石川 恒太郎）



(1) 清武城跡遠景(矢印本丸)



(2) 調査地区平場



(1) 本丸より見た南西平場



(2) 南西平場



(1) 清武城跡西北端



(2) 伊東祐廟の墓(中央)